

福井の科学者

地域に根ざす科学者運動 116

2011・10

目 次

日本科学者会議福井支部幹事会見解
福島原発災害の教訓を活かして原発に依存しない社会づくり
のために

日本科学者会議福井支部幹事会（1）

21世紀の世界を動かす非同盟とASEAN
- マレーシアとマハティールに学ぶ -

北 出 芳 久（5）

「マレーシア平和と友好の旅」紀行文
- マハティール元首相との面談など -

山 本 富士夫（14）

エリザベス・グレイス論文
「中野鈴子のプロレタリア詩」（要旨）の紹介

稲 木 信 夫（37）

編集後記

（47）

日本科学者会議福井支部

= 10月新刊 =

高木秀男著

『近代日本の教育政策と科学技術体制 上、下

- 学問・思想の自由と科学者の社会的責任 - 』（科学堂）

目 次

まえがき

第1章 尊皇攘夷から文明開化へ

1. 黒船の衝撃と近代科学・技術の力
2. 密航して学んだ幕末の留学生たち
3. 江戸時代の日露関係とロシア留学生
4. 蕃書調所と万能科学者・川本幸民
5. 工部省の時代と近代技術者の養成
6. 日本の近代化と情報通信事業
7. 日本の近代化と東京大学の創立
8. 三菱商船学校の創立とその後の発展

第2章 日本の近代化と近代科学

・技術の全面的導入

1. 絶対天皇制国家のための教育政策
2. 科学の制度化にむけて
3. 日本最初的女子留学生と札幌農学校の開設
4. クラーク博士の弟子たちと札幌遠友夜学校
5. 帝国大学の誕生とその影響
6. 京都帝国大学の創立と新しい試み
7. 『平民新聞』と初期社会主義運動
8. 大逆事件の衝撃と知識人・文化人

第3章 大正デモクラシーと時代の雰囲気

1. 大正時代と文化史からみた大正期
2. 西洋デモクラシーと吉野作造の民本主義
3. 学生運動の源流「東京帝国大学新人会」の結成
4. 大正デモクラシーと文化学院・自由学園の設立
5. 本郷・菊富士ホテルや
池袋モンパルナスに集いし人びと
6. 大正自由教育の進展と自由大学の開設
7. 新潟・木崎争議と無産農民学校

第4章 近代日本における科学の制度化

1. 第一次世界大戦後の科学の制度化と技術官僚
2. スーパースターの来日と女性学士の誕生
3. 科学者たちの自由な楽園・理化学研究所の設立
4. 日本科学史からみた大正期
5. 科学・技術動員への始動
6. 切手から読み解く満州帝国
7. 外地での大学および高等教育機関の設立

第5章 戦争のための国家総動員法と

科学・技術動員

1. 昭和前期の思想弾圧と侵略戦争への道
2. 治安維持法の女性犠牲者
・伊藤千代子と岩倉靖子
3. 唯物論研究会の結成と技術論争
4. 京都帝大瀧川事件と同人雑誌
『世界文化』の発行
5. ファシズム型総力戦体制へ向けて
6. 各界若手エリートを集めた総力戦研究所
7. 国家総動員法と新体制運動
8. 戦闘的自由主義者・河合榮治郎の闘い
9. 戦争遂行のための文化統制と文学者たちの対応
10. 美術家や音楽家たちの戦争協力
11. 幻の甲子園大会と愛知一中予科練総決起事件
12. 関東軍七三一部隊と医学者たちの犯罪
13. 科学・技術動員の終局と敗戦

第6章 占領下での民主主義の導入と

民主教育の始動

1. 日本の敗戦と科学者・技術者たちの対応
2. 新聞・出版業界における紙をめぐる攻防と
GHQによる検閲
3. 京大天皇事件と第二瀧川事件
4. 科学者の戦争責任と日本学会議の発足
5. 新憲法制定の経緯と日本国憲法の公布
6. 戦前教育の反省にもとづく教育基本法の成立
7. 学制改革と新制大学の発足
8. 朝鮮戦争と日本の科学技術をめぐる状況
9. 序論・戦後日本の科学技術体制と大学改革

参考文献

人名索引

A 5 判上製836頁 定価上下セットで8,000円

限定200部 注文は下記まで

高木秀男：fwnf2030@mb.infoweb.ne.jp

(910-0034 福井市菅谷1丁目14-4)

TEL / FAX 0776・22・2715

日本科学者会議福井支部幹事会見解 福島原発災害の教訓を活かして原発に依存しない社会づくりのために

日本科学者会議福井支部幹事会

去る 3 月 11 日に M9.0 の東北地方太平洋沖地震が発生し、その超巨大地震に随伴して発生した大津波が岩手県、宮城県、福島県を襲った。日本列島のほとんど全沿岸にも大小の津波が到達した。ここに改めて、不幸にして亡くなられた方々に謹んで哀悼の意をささげるとともに、被災された人々に衷心よりお見舞いを申し上げます。

超巨大地震と高さ 13 m の津波（東京電力 7 月 8 日発表）は、福島第 1 原子力発電所を襲った。その後の数日間に 1～4 号機では水素爆発が発生し、原子炉建屋の天井破壊を引き起こした。原子炉ではメルトダウンが起り、今も再臨界の恐れを否定できない状態にあり、原子炉の冷温停止を目指して冷却水を送り続けている。原発サイト内に溜まった 12 万トンを超える大量の冷却水は、アレバ社（フランス）製の汚染水浄化装置で、既に 3 回の漏水が起こるなどして放射能汚染処理が不十分なままであるため、海がさらに放射能で汚染される恐れも依然として続いている。

これまで「原発推進派」といわれる人びとは、原子炉の過酷事故を避ける制御をできると主張してきたが、今回の原発事故により、原発は極めて危険であり人間が絶対に制御できるものでないことが明らかになった。巨大な地震動による配管等の損傷や緊急冷却システムの不全が起ると、原子炉とその周辺のシステムはもはや制御できず、結局大量の放射能が環境に広く放出され、海、大気、土壌は原発立地を含む広範囲の住民の生活を破壊するほどに汚染されてしまい、人災としての「原発災害」に陥った。避

難・退避を強いられた住民たちはいつになったら自宅に帰れるのかという切実な問いを発しているが、政府も東電も明確な回答ができないでいる。今回の原発災害に対する国内外からの救援活動とは裏腹に、地震活動期にある日本の原発政策の間違いや安全管理と防災の貧弱さが広く知れ渡り、風評被害と重なって日本は国難に陥ってしまった。

そのような中にもかかわらず、6 月 18 日に海江田万里経済産業相は、「東京電力福島第 1 原発事故を踏まえ、全国の原発に指示した追加安全対策が実施済みであることを確認した。あわせて、定期検査を終えた原発の再稼働を認めるよう要請する方針だ」などと極めて無責任な発表をした。7 月 6 日に政府は突然ストレステスト（耐性試験）を再稼働のための第 2 段階試験として行うと発表した。しかしその内容は、EU が導入したストレステストにならって自然災害やテロ行為を含めた想定外の異常事態に備えて原発の安全性をシミュレーションによって評価するかどうか、また、諸外国の専門家の評価を加えるのかどうかについて、なにも明らかにされていない。福島原発災害の収束や廃炉の工程完了までに数十年かかると言われている現段階において、このような再稼働を前提としながらの政府の発表は、利益優先の経団連等の圧力に屈したものであり、原発に依存しない社会を望んでいる大半の国民の意見や国会での議論を無視し、極めて非民主的な暴挙を犯しているものであると言わざるを得ない。

今回の原発災害で、被災者たちは、憲法で規定されている（1）恐怖と欠乏から免れ平和の

うちに生存する権利（前文）、（2）生命、幸福追求の権利（13 条）、（3）生存権（25 条）の三つの権利を極度に侵害されているが、国は、憲法に基づくそれらの権利を守ろうとせず、災害発生後の緊急時対策の不全に対して謝罪も反省も示すことなく、災害補償の責任逃れの意図すら見せ始めている。

日本科学者会議は、科学と技術を国民のため、国民のものとして発展させ利用しようとする民主的な学術団体である。その活動の一つにエネルギー・原子力に関わる研究委員会がある。私たちは、政府・電力事業者・原発推進者たちが「安全神話」をもとに進めてきた原子力政策が結局福島原発災害を引き起こしたとしてその過ちを分析し、今後活かすべき教訓をまとめてきた。日本科学者会議は、本部だけでなく全国の多くの支部で市民公開シンポジウムや講演会等を開催し、国民に向けて原発災害を説明し、新しい社会の在りかたを研究しつつある。

特に福井県は、13 基の商業原子炉、高速増殖炉「もんじゅ」、廃炉が決定されている「ふげん」の 15 基を有し、福島県や新潟県以上の日本一の原発集中立地県である。福井県には多くの活断層があり、大地震発生の可能性がある。安全神話が崩壊した今、福井県にある原発が、もし東日本大震災と同程度の地震と津波に襲われれば、福島原発災害より大きなものになることが確実であり、十分な防災措置をする必要があることは当然である。

日本科学者会議福井支部は、その発足から今日まで約 40 年間、原発の危険性はもとより環境、防災、経済問題などについて研究しその成果を発表してきた。ここに、当支部はこれまでの研究実績を踏まえて、福島原発災害の教訓を活かし原発に依存しない社会づくりを目指すため、次の見解を発表する。

1. 原子力エネルギーは、コストが低いなどというごまかしは通用しない。原発災害による賠償や復旧・復興経費、廃炉経費、ならびに、いわゆるダウンストリーム（放射性廃棄物の処理等）の経費を加えた負の総額は国家予算に近い膨大なものとなり、原発には経済的合理性がないことが明らかになった。子々孫々にまで原発による大きな負債を押し付けるべきでない。
2. 原子力エネルギーが、すべての産業の振興や原発災害後の経済復旧・復興の基本であるという、政府・経団連や電力事業者ら推進派の論理は、既に破綻してしまった。
3. これまで政府や原発推進派によって、原発は CO₂ を出さないで地球にやさしくクリーンであると喧伝されてきたが、福島で水・空気・土壌が放射能で汚染されただけでなく、今や放射能は地球規模で海洋や地球大気に拡散し、地球全体を汚染し始めている。
4. 原発事故・災害が発生した場合には、その内容ならびに放射能の放出・拡散に関して、十分な量のオリジナル情報を速やかに国民ならびに世界の人々に提供すべきである。決して、政治的・経済的な視点から情報を操作したり捏造したりしてはならない。
5. 放射線被ばくとその健康への影響について、政府は原発事故発生からしばらくは「直ちには影響がない、冷静に行動を」などと発表し、放射線の健康への影響を過小評価したり、被ばく放射線量の基準を急遽恣意的に変更するなどした。また、事故発生から約 1 週間、SPEEDI による放射性物質の拡散状況の発表をふせるなどしたが、その情報が外国から逆輸入されていることが明らかになり、その後政府は SPEEDI の情報を発表するようになった。このような政府

の対応は、国民の安全・安心を守ることに
ならず、結局国民は大きな不安を抱き大変
な混乱に陥ってしまった。

6. 今回の福島原発災害の最高責任者は菅直人
首相および東京電力の勝俣恒久会長と清水
正孝社長である。前者二人は今なおその職
にとどまっており、清水氏は6月末の株式
総会で退任したが、引責辞任とは言ってい
ない。今回の災害の責任を明確にとるため、
彼らはもとより関係の責任者は全員、引責
辞任すべきである。
7. 若狭湾とその沿岸は活断層の多いことで知
られているが、過去にも大地震の発生が見
られ、今後もその可能性は否定できない。
日本列島全体が地震の活動期に入ったと言
われている中で、福井県ならびに琵琶湖(関
西の水源)を有する滋賀県を含む関西地区
の住民が安心して暮らせるためには、若狭
湾の原発を全て停止し、廃炉としなければ
ならない。特に、ナトリウムを使用する「も
んじゅ」は緊急時には、冷却に水を使うこ
とができず最も危険であるので、運転再開
を断念し直ちに廃炉とすること。福井に限
らず、国は、全国にあるすべての原発の運
転を停止させ廃炉とする方針を速やかに決
定すべきである。原子炉の新增設工事と計
画の全てを中止させるべきであることは当
然である。
8. 巨大地震や巨大津波を想定し、断層を含む
地層や地質の調査研究に十分な国家予算を
充当し、その調査結果を国民に公表する仕
組みが必要である。
9. 「想定外」や「残余のリスク」を理由にしつつ、
「安全神話」と経済性優先の思想を底流に
おいた「耐震設計審査指針」は、全面的に
見直さなければならない。それは、決して
再稼働のためではない。福島原発災害で明

らかになったように、想定されるあらゆる
災害やリスクに対する「想定」を必要とす
るからである。かりそめにも応急的な地震
対策や津波対策を採り、現有の「耐震設計
審査指針」をクリアできたなどとして、原
発を運転続行させたり再稼働させたりして
はならない。

10. これまでの原子力防災（緊急時対策）のし
くみは極めて不十分・不完全であり、福島
の自治体での防災訓練は今回の災害では全
く役に立たなかったことを踏まえて、国は
放射能に汚染された地域の住民、被災者の
生命・財産等を守るべく、防災対策の根本
的な見直しを行い、その具体化を図らなけ
ればならない。
11. 今回の原発災害被害者・企業・団体の全て
に十分な賠償・補償をすること。その経費
は、国民の了解なしに国の予算を使うべき
ではない。
12. 現在国際的に懸念されている「軍事テロ」
や「サイバーテロ」による原発攻撃が発生
すると、その被害は破壊的なものとなると
想定される。そのような場合の防災や避難
などを広くしかも十分に議論し、その備え
を国民に明らかにすべきである。
13. エネルギーの需給バランスや電力供給シ
ステムの在り方を根本的に見直すとともに、
再生可能なエネルギーへの転換とエネル
ギー消費節約を具体化させる必要がある。
14. 原発推進の経済産業省の下にある原子力安
全・保安院と、内閣府にある原子力安全委
員会とは、共に著しく原発推進に偏ってい
て、しかもそれぞれの役割があいまいで、
原子力利用規制が全く機能していない。そ
れらは、第三者検査機構の本来の理念に基
づいて、原子力利用規制のために政府とは
独立した仕組みに作り直す必要がある。

おわりに、私たち民主的科学者は、広く議論する場に臨みながら、世界の人類の持続可能な発展を図るとともに、国民の平和な生存権を守るために、原発に依存しない社会づくりのための研究活動を行い、その成果を国民に向けて発表して行く決意であることを表明する。

2011 年 7 月 11 日

21 世紀の世界を動かす非同盟と ASEAN - マレーシアとマハティールに学ぶ -

北 出 芳 久 (福井県 AALA 理事)

なぜ今、マハティール、マレーシア、ASEAN
なのか

福井県 AALA (アジア・アフリカ・ラテン
アメリカ連帯委員会) は、2010 年 11 月 マレー
シアへの「平和と友好の旅」を行い、マハティール
元首相に会って懇談してきた。

マレーシア訪問の最大の目玉は、もちろんマ
ハティール元首相と会って懇談することだった
が、私自身の関心事はマ氏との懇談とマレーシ
アでの全見聞を通して、アジアと世界の平和の
本流となっている非同盟の地域、ASEAN 存立
の基盤を学ぶことにあった。

20 世紀は、ある意味で軍事同盟と戦争の時

代であった。第一次・第二次世界大戦、その後
の米ソ二大国の覇権争い、それにづく米国一
極覇権がその主役を演じてきた。これに対し
て、21 世紀の世界では非同盟と平和を求める
勢力が世界の主流となる時代を切り拓きつつあ
る。20 世紀半ば、米ソ二大国の覇権主義に対
抗して誕生した非同盟運動は着実に成長して、
今では非同盟諸国首脳会議構成国は世界の国々
の 74%、人口で 84% という圧倒的多数を占め、
国連でも多数を占めるまでになった。軍事同盟
はつぎつぎと解体され、平和の共同体が各大陸
でつくられ、残る軍事同盟は日米、米韓、米豪
及び NATO の 4 つに、軍事同盟締結国の人口
はたったの 16% に過ぎなくなった。また、非



同盟諸国のイニシアティブで非核地帯が各大陸につくられ、核戦争阻止、核兵器廃絶の運動も核兵器保有国に期限を切って削減せよと押し付けるところまできている。このような世界の変化をつくりだした主役は、言うまでもなく非同盟運動である。ASEANは中でも、非同盟運動創始地域にふさわしい先進的役割を果たしてきた。

このような ASEAN の ASEAN たる特質を学ぶことは、ASEAN の隣にあって、どのようにアジアに向き合うかが問われている日本の進路を考える上で決定的に重要である。

また、昨今話題になっている東アジア共同体を考える上では、なおさら ASEAN を理解することが欠かせない。

1990 年代半に森嶋通夫氏がはじめて「東アジア共同体」を提唱した時は、まだ大きな反響は起こらなかった。もっとも、森嶋氏が提唱した「東アジア共同体」は日中韓三国による、いわば東北アジア共同体であり、これは日中韓の「過去清算」を通じて平和と友好の東北アジアをつくろうという動きに引き継がれている。ASEAN と日中韓を含む「東アジア共同体」ということになると、90 年代末から主として ASEAN の方からマハティールの「EAEG」やその後の「ASEAN+ 3」などの形で模索が始まり、21 世紀に入って日中韓の方からもようやく関心が広がりはじめた。しかし、これは主として日中韓の経済力と ASEAN との結合に力点が置かれていて、平和の東アジア共同体への展望を開くものではなかった。民主党の鳩山由紀夫氏が唱えたのもこの種の共同体論に位置するのではない。

私自身は、日中韓とりわけアメリカとの軍事同盟につながれた日本と韓国が ASEAN に学び、ASEAN が示す方向を尊重しながら、

ASEAN と結びついて東アジア共同体への道を探るべきだと考えてきた。なぜなら、ASEANこそバンドン会議に始まる非(軍事)同盟が脈々として流れており、世界の平和実現の本流をなしているからである。

仮想敵国を持ち戦争を前提にした時代遅れの軍事同盟につながれている日本と韓国、また時として覇権主義的行動に走る中国が ASEAN に学んで自らの在り方を考えたとき、はじめて東アジア共同体は現実のものになるであろう。

いずれにしても、アジアに生きる日本と日本人が「過去清算」だけにとどまらず、現代世界を動かす非同盟の本流に接近し、協調し、共存し、共同して、アジアと世界の平和構築に役立つためには、ASEAN を知り、ASEAN に学ぶことが必要である。

それにしても、ASEAN に学ぶのになぜマレーシアなのか？ それは、マレーシアにはマハティールがいるからであり、マレーシアは ASEAN の縮図のような国だからである。マハティールはマレーシアの首相を 22 年間務めていたから、その間は ASEAN のリーダーでもあった。マハティールに会えば ASEAN の真髓が聞けるであろう。それに、マレーシアは異なる民族、文化、宗教、経済発展地域を抱えた多様性に富んだ国だから、異なる政治体制、宗教、文化、経済発展を抱えた国の連合体＝ASEAN の特質はマレーシアが教えてくれるに違いない。これが私の考えであった。

最後に一つ。私が ASEAN に強い関心を抱くようになったのは、ASEAN の加盟国を律する TAC (東南アジア友好協力条約) の素晴らしさに魅せられたからである。TAC の第 1 条と第 2 条は、次のようになっている。

第1条 …締約国の国民の間の永久の平和、永遠の友好、協力を促進することを目的とする。

第2条 締約国はその相互の関係において次の基本原則を指針とする。

- a すべての国家の独立、主権、平等、領土保全及び国家的同一性の相互尊重
- b すべての国家が外部から干渉、転覆又は強制されずに存在する権利
- c 相互内政不干渉
- d 意見の相違又は紛争の平和的手段による解決
- e 武力による威嚇又は武力の行使の放棄
- f 締約国間の効果的協力

なんと素晴らしい条約だろうか。TACの第2条は、一見してバンドン10原則と国連憲章2条3、4項からなり立っていることが分かる。国連憲章2条3、4項は日本国憲法9条と同趣旨の条項である。私は、TACと9条の相似性に目を奪われた。それに、第1条の「永久の平和、永遠の友好、協力」のために、の文言がまた素晴らしい。ASEANは非同盟運動の歴史を踏まえるとともに、非戦の世界遺産ともいうべき日本国憲法9条に相応する平和原則によって、加盟各国間の永遠の平和と友好、協力関係を築こうとしている。10カ国もの間で、過去何十年にもわたってバンドン10原則と日本国憲法9条を日々実践しているASEANとは、いったいどのような地域なのか、このようなASEANに日本を近づけたい、いや韓国も、中国も近づけたい—これが私の素朴な願いであった。

マハティール氏との懇談はどのようにして実現できたか

「マハティールに会いに行こう」と私が提起した時、どれだけの人がまともに受け止めたか

ろうか、いつもそうだが、私は本気だった。しかし、彼に会う手がかりはなにもなかった。県AALA理事会で話し合った時、「日本AALAの秋庭代表理事に仲介してもらったらどうか」との意見が出され、「それしかないかな?」と思ったぐらいである。しかし、秋庭氏はマハティールと面識がないとのことで、結局在日本マレーシア大使館に直接お願いすることにした。昨年7月中旬、日本AALAにマレーシア大使館へのコンタクトを取ってもらった。すると、「マハティール元首相との懇談申請書」を提出してほしいという。早速私たちは「申請書」を、また日本AALAは「日本AALAの紹介文」を提出したところ、大使館から「次席大使が会ってもよい」との返答が返ってきた。

7月27日、山本理事長と私はいそいそとマレーシア大使館に出向いた。出迎えてくれたのは、ロジアン次席大使と通訳の中田祥子さん。ロジアンさんは40歳代の人なっつこそうな方で、私たちの要請にじっくり耳を傾けてくれた。私たちは、「バンドン55周年、日本AALA結成55周年の年に、22年間マレーシアとAALAの指導者だったマハティール元首相に直接会って、非同盟運動とりわけASEANとマレーシアの発展についてお聞きしたい。そして、憲法9条を生かした私たちの平和の取みに示唆を得たい。」と、真正面から頼み込んだ。また山本理事長は、福井大学がこれまでマレーシアからの留学生を150人近く受け入れ、福井の地で日本とマレーシアの友好的な交流が行われていることを紹介した。この懇談で、ロジアンさんは私たちに「マハティール氏に連絡してみましょう。」と快諾してくれた上、「外務省の副大臣にも会いませんか。」と予想もしない一言まで付け加えてくれた。最後にロジアンさんは「以後は、中田さんを通して連絡しましょう」と言ってくれ、記念写真まで撮って別

れた。山本理事長と私はこの時点で、私たちの熱意がロジアンさんの気持ちを動かし、私たちとの信頼関係ができたことを確かめあい、マハティール元首相には必ず会えると確信した。

その後、マハティール事務所からの要請に応じて山本理事長の略歴などを送付しているうちに、8月18日マレーシア大使館から待望のメールが届いた。それには、「マハティール氏が11月22日午後3時から福井県 AALA 旅行団と会う」とあった。また数日後、マレーシア外務省副大臣等との懇談も22日午前に確定したとのメールが届き、11月22日は福井県 AALA にとって「歴史的な日」になりそうであった。この間、マハティール事務所、マレーシア大使館及びマレーシア外務省のアバン・サルドン氏との間のメールのやり取りは20数回に及んだ。

こうして、私たちの熱意と日本 AALA の過去の実績がマレーシア大使館を動かし、マハティール氏とマレーシア外務省副大臣との面談が実現するにいたったのである。

「マハティールさん、あなたこそノーベル平和賞にふさわしい」

「あなたこそノーベル平和賞にふさわしい」—これは今回のマレーシア訪問団の一員として参加した辻健隆（ペンネーム恋坂通夫）さんの「マハティールさん」という詩の一節である。彼のこの詩「マハティールさん」は、実に的確にマハティール元首相の全体像を表現していた。「ノーベル平和賞云々」は、私たちのマレーシア訪問がちょうど中国の劉曉波氏の同賞受賞をめぐって議論が交わされているさ中であったため、時宜に合った詩であった。

22日午後2時40分、私たちは厳しいセキュリティ・チェックをスイスイ通ってエレベーターを3回乗り継ぎツイン・タワーの86階会

議室に案内された。3時ちょうど、マハティール元首相は私たちの待つ会議室に静かに入ってきた。まずは私たちが贈った福井のメガネを掛けて、ニッコリと笑顔で写真に納まった。



マハティール氏に挨拶する筆者

席に着いた彼は、静かに穏やかに、友人を迎えるかのように、話しだした。まず「日本 AALA は平和のために素晴らしい活動をしている。民間のあなた方の活動は極めて重要だ」と、私たちの活動を評価した。マハティール元首相が AALA のことを知っていて評価してくれたので嬉しかった。同時に、日本 AALA の存在感というか、これまで非同盟首脳会議の日本からの唯一の代表（オブザーバー）として、非同盟運動に貢献してきたことを改めて認識させられた。それにしても、マハティール氏はなんと素晴らしい指導者なのだろう。日本 AALA のような民間の団体の平和と友好の活動を世界平和のための重要な構成部分として認識している指導者が、他にいるだろうか。彼の一言によるものか、それともマレーシア全体に既に定着した考えなのか分からないが、マレーシア外務省が私たちを VIP 待遇で迎えてくれたのも AALA に対する共通の認識によるものではないか。

マハティール元首相の確固たる平和の思想は、私たちの質問に対する回答に如実に表れていた。

私たちが尖閣諸島を巡る中国との対立をどう解決すべきかサジェスションを求めたのに対して、彼はこう答えた。

「日米同盟は中国を敵視している。日本が中国を敵視すれば、中国も日本を敵視する。敵視は敵視を生み、戦争に至らざるをえない。戦争は破滅をもたらすだけで、なんの解決にもならない。したがって、国家間の紛争は、話し合いで解決すべきだ。マレーシアもシンガポールとの間に領土問題を抱えていたが、二国間の話し合いと国連への救済請求でシンガポールに有利でマレーシアに不利な中味だったが解決した。私たちは、戦争より話し合いによる平和的解決ができたことを喜んでいる。」

彼の「非同盟による平和」の思想は一貫している。8月産経新聞社主催「アジアの未来」シンポで来日した彼は、「軍事同盟に頼って平和を守ろうという考えは時代遅れだ」とも言っている。非同盟運動発祥の地・アジアでASEANを発展させてきた彼の実践が、非同盟と平和に対する確固とした考えをつくっていることを読みとることができた。

私はマハティール元首相との懇談を終えて、改めて日米軍事同盟＝日米安保廃棄の決意を新たにした。憲法九条をもち、唯一の被爆国であるわが国が核兵器廃絶運動で大きな役割を発揮しながら、自らは世界に広がる非核地帯に入ることもできず、沖縄の基地問題や最近の尖閣諸島問題にも確固とした解決策を提起することができないのは、日米軍事同盟につながっているからである。私たちの課題は、非同盟運動とマハティール元首相の「非同盟こそ平和の源泉」という思想を文字通り国民多数のものにすることである。

VIP 待遇で私たちを迎えてくれたマレーシア外務省

ウイスマ・プトラに着くや否や、メールのやり取りをしたアバン・サルドンさんが迎えに出てくれた。気さくな人で、「よく来てくれました、北出さん」と握手を求めてきた。私たちは階段式の大ホールに案内され、次に代表 10 人が案内されて外務副大臣に表敬の挨拶を行った。



外務副大臣（右端）、山本団長（中央）と

その後大ホールで、いずれも若い外務省高官とASEAN高官が福井県AALAの見解に賛同しつつ、マレーシアとASEANの歴史と現状を誇りを持って発言した。ここでは、二つのことを取り上げておく。

一つは、ASEAN高官がマレーシアの領土問題を例に挙げて、TAC「第4章 紛争の平和的解決」の弱点を指摘したことである。TAC第4章は紛争の平和的解決についての条項を並べている。その内容を列挙すると、

- ①当事国による話し合いによる解決。
 - ②ダメなときは各国大臣級による理事会のあつせん、仲介、審査、調停による解決。
 - ③国連等に訴えることもできる。
 - ④加盟国は当事国に援助をすることを妨げられない、
- となっている。



ホールで ASEAN 高官 (右上端) の話を聞く

問題は②の理事会の役割である。②には「すべての紛争の当事国が合意しない限り適用しない」という但書きがあるため、紛争相手国或いは関係する一カ国でも合意しなければ、積極的規定が適用されないことが起こり、真の解決ができない弱点を包含している。同時に、この規定は ASEAN が原則として満場一致でことをすすめて行くという、共同体にふさわしい質の高い規定でもある。高官は、TAC の弱点を率直に認めた上で、なおかつ TAC の素晴らしさを語っていたのが印象的であった。

いま一つは、マレーシアの森林保護についての質問に対して、「マレーシアでは、森林の 60% は守ると法律で規定している。現にそのとおり守られている」と胸を張って答えていたことである。マレーシアの自然を保護しつつ、資本主義を発展させる姿を垣間見た思いであった。

大ホールでの対話・交流のあと、VIP ルームで外務省職員とともに、彼らと語り合いながらマレー料理をご馳走になった。外務省訪問はすべての点で友好的な交流に終始した。

多様な文化・価値観の相互尊重こそ ASEAN と 非同盟の源泉

ASEAN10 カ国は、さまざまな政治体制の違いを乗り越えて平和とくらし（経済）の一点で強固な結束をつくっている上、2015 年を目標に政治的統合にまで向かおうとしている。私の関心は、こんなにも政治体制が違う国どうしがどうして一緒にになれるのかという点にあった。実際、社会主義をめざすとされるベトナム、軍事独裁政権のミャンマー、同じ資本主義国でも親アメリカだった国とそうでない国と、さまざまな政治体制をもつ国々が一つの共同体をめざすなど、あり得ないことに思われる。また、仏教徒の多いタイやビルマやベトナムとイスラム教徒の多いインドネシアやマレーシアで、イスラエルとパレスティナのような戦争が起こらないのが不思議なくらいである。異なる国々をどのようにして一つの共同体にまとめ上げてきたのか、だれしも不思議に思うことである。

マハティール氏やマレーシア外務省では、そのことを突っ込んで聞くことはできなかった。そこで、私は街を歩きながら考えた。マレーシアの街を行き来する人々は多種多様である。とくに目につく女性の服装が象徴する宗教の違いである。マレー系住民はイスラム寺院で、中国系住民は仏教寺院で、インド系住民はヒンズー



左マレー系少女、右インド系女性

教寺院で、それぞれ民族グループごとに熱心な信徒として礼拝していた。信仰心の薄い日本人にとっては驚くべき光景であった。それが一転、街の通りや商店では、マレー系も中国系もインド系も民族の違いを越えて、お互いに違和感なく接近、接触、混在して暮らしていた。マハティール元首相のプミプトラ政策浸透の結果なのか、国内ではごくわずかの外国人の往来しか見ない日本人としてはやはり驚きであった。

短期間の滞在で、しかもほんの少し垣間見ただけだが、マレーシアではマレーシア社会を構成する各民族が他の民族の文化や生き方を尊重して暮らしているように思えた。マレーシアにおける民族紛争も69年の5・13事件以後起こっていないという。71年から始まったプミプトラ政策が異なる文化や価値観を相互に尊重する社会をつくったのか、そうだとすると、異なる民族、宗教、くらし、価値観を相互に尊重する社会の経済的土台をつくったという点で、マハティール元首相はとてつもない仕事をしたといえる。

私は、マハティールがその著書の中で述べていた言葉を思い出した。彼はこんなことを言っていた。「多様性こそアジアの特徴だ。それを西欧の民主主義や価値観がよいものだからと言って押し付けて西欧の価値観に統一しようとするのは間違いだ」と。マハティールは、多様な存在であるマレーシアの落とし子であり、またその守り手であったことがよく分かる。

マレーシア国内における多様な価値観の相互尊重を、東南アジア諸国の国家間の相互尊重にまで拡大したのがASEANだと、私は見た。東南アジア地域の最も大事な平和と安定、経済協力を保持するために、異なる国の在り方をお互いに認め合う—これがASEAN存立の基盤になっているように思う。私は、バンドン会議以来世界の先頭を切ってきたASEANの非同

盟主義も、多様な価値観の相互尊重という思想が根付いているからだと思う。軍事同盟はもともと仮想敵国をつくり、敵視し、対立することを本質にしている。対立、敵視は異なる相手国を認めないところからきている。しかし、異なる価値観を相互に認め合い、最も大切な「平和」に結集するなら、非同盟に至らざるを得ない。クアラルンプールの街を歩いて、私はASEANと非同盟の本質をつかんだように思った。

アジアの平和を築くために—非同盟と東アジア共同体へ

マハティールと外務省高官と懇談し、クアラルンプールとマラッカの街を歩いただけだが、私は私の持論の正しさに確信を持った。

今日、日本、中国、韓国、北朝鮮が構成する東アジアでは、平和にとって危険な状況が続いている。このところ相次いで起こった中国との間の南沙諸島領土問題、北朝鮮による韓国哨戒艇沈没事件や砲撃問題、日韓領土問題、北朝鮮による拉致問題や核兵器開発問題などは、東アジアにおける平和を脅かしている。これらに対して、軍事力を強化して解決すべきという議論が盛んに行われている。しかし、これらの論者も軍事力強化でどのように解決を図るかを誰ひとり示すことができない。軍事力増強は、結局戦争に訴える以外になく、戦争をはじめてもこれらの問題を解決できないことは、これらの論者もよく知っているからである。軍事力による圧力は、すべてを無にしてしまう戦争を引き起こす可能性のある危険極まりない挑発になるだけである。

それなら、どうすればよいのか。

第一に、これらの紛争を解決するにはマハティール氏の言うように徹底した話し合いによる解決の立場に立つことである。しかし、ただ

話し合いというだけでは、相手が無視したり乗ってこなければ解決に至ることはできない。北朝鮮の核兵器開発問題での 6 カ国協議のように、一進一退を繰り返すだけである。だから、私がここでいう話し合いは、関係各国が共通して認める基準にのっとった話し合いということである。関係各国が共通して認める基準＝ルールはあるのか？ 実は素晴らしい基準があるのである。現在東アジアで起こっている紛争のすべての当事国すなわち日本、中国、韓国、北朝鮮、ロシア、米国のすべての国が認めている基準、それは TAC（東南アジア友好協力条約）である。TAC は、上記すべての当事国が締約国となっている条約である。（ここで付け加えておくと、TAC は ASEAN の条約だが、ASEAN は周辺国に自らの存在を認め尊重させるために、TAC 加盟を勧めてきた。それに応じて上記の国々も締約国になっている。）すべての締約国が認める TAC に則って話し合いをすれば、ルールのない話し合いのように無視したり、逃げたりすることはできない。

TAC の第 1 条を再掲すると、「この条約は、締約国の強化、連帯及び関係の緊密化に寄与する締約国の国民の間の永久の平和、永遠の友好及び協力を促進することを目的とする」と。すなわち、日本・中国・韓国・北朝鮮・ロシア・米国の各国は、この条約に基づいて、お互いの連帯、緊密化に役立つ諸国民の永久の平和、永遠の友好・協力を促進するという共通の目的を持っている。したがって上記 6 カ国は、第 2 条「d. 意見の相違又は紛争の平和的手段による解決、e. 武力による威嚇又は武力の行使の放棄」を指針として話し合うことを、基本原則として認めている。また、第 4 章紛争の平和的解決の中の第 13 条には、「締約国は、紛争が発生することを防ぐための決意及び誠意を有するものとする。締約国は、自国に直接影響する問題に

ついで紛争、特に地域の平和及び調和を害するおそれのある紛争が生じた場合には、武力による威嚇又は武力の行使を慎み、常に締約国間で友好的な交渉を通じてその紛争を解決する」に基づき、「紛争の平和的解決」を図ることを義務付けられている。6 カ国はすべてこの条項を認めて締約国になったのであるから、この基準に則って話し合いをしなければならないのである。マハティール氏やマレーシア外務省高官が話していたように、同じ TAC 加盟国であるマレーシア、シンガポールはこの TAC に則って領土問題を話し合いで解決した。私は、政府与党はもちろんのこと、野党も「TAC によって話し合いを」と言わないのが残念でならない。TAC は優れた条約であるが、使わなければ意味がない。私は改めて、「TAC に則って話し合いで解決を！」を国民世論にし、政府に要求することが憲法 9 条を持つわが国の国民の義務だと考えている。

第二に、わが国が非同盟の立場に一日も早く立つことが求められている。わが国は憲法 9 条を持ちながら、日米安保条約に基づく日米軍事同盟につながれているため、9 条に基づく平和外交をすすめることができない。市民レベルの核兵器廃絶運動は、昨年の NPT 再検討会議での大活躍や原水爆禁止世界大会の成功などで大きな役割を果たしてきた。しかし、日米同盟につながれた日本国（政府）は、米国の覇権主義の片棒を担ぎ、中国、北朝鮮敵視政策によって東アジアにおける、また世界全体の戦争の根拠地になっている。そのため、日本は世界最大の軍事力グループを誇るだけでなく、唯一の被爆国であるのに核兵器廃絶のイニシアティブをとらない国家になり下がっている。今日世界の主流となっている非同盟諸国の、とりわけ ASEAN の平和と核兵器廃絶の地道且つ壮大な取組みとは対照的である。

わが国が憲法 9 条に基づく平和主義を掲げて平和と核兵器廃絶でイニシアティブを発揮するには、9 条に反する日米軍事同盟からの離脱と非同盟諸国の一員になることが不可欠である。わが国の軍事同盟からの離脱は、世界の覇権主義に痛撃を与え、平和の地域共同体づくりでも核兵器廃絶を現実のものにする上でも決定的な影響力を発揮するに違いない。とくに、東アジア共同体づくりは抜本的に前進するに違いない。また、わが国の非同盟諸国への参加は、「非同盟こそ主流」という 21 世紀の世界の流れを決定づけることになるだろう。

したがって、すべてのわが国の平和運動が日米安保条約を廃棄して日米軍事同盟からの離脱を実現する運動に収斂することが求められる。マハティールとマレーシア、ASEAN は、日本がこの道をとることを待っているに違いない。

第三に、わが国の市民とマレーシアや ASEAN 諸国の市民との間の市民間交流を盛んにすることは、なによりも重視されなければならない。先ずは知ることである。隣人と仲良くするには、お互いに交流して相手を理解することが必須である。まして、東アジアの平和の決定的な要素となり、近い将来一緒に共同体をつくろうかという相手を知らずして、どうして「仲間」になれるだろうか。お互いを理解するのに一番役に立つのは、交流である。

私たちがマハティール氏に提起した日本・韓国・マレーシア合同音楽会は、これら三国の文化の面での市民交流を活発にする一つの試みである。福井県 AALA では、来年 7～8 月に現代音楽演奏家と市民合唱団の二つのグループによる日・韓・マレーシア合同音楽会のマレーシア開催をめざして準備している。これが実現すれば、市民の間にお互いの文化の尊重と相互理解がすすみ、三国市民の間に新たな結びつきをつくることできるに違いない。

また、マハティール氏が要請した「日本語で教える大学づくり」は、マハティール氏の話では ASEAN10 カ国の学生が学ぶことを前提としているので、この企画が前進すれば ASEAN 各国の学生・市民との学問と人の交流を盛んにすることは確かである。現在、東日本大震災による財政難で困難に直面しているが、可能ならば福井県 AALA が何らかの形でマ氏要請に応えたいと思っている。

「マレーシア平和と友好の旅」紀行文 - マハティール元首相との面談など -

山 本 富士夫

1. はじめに — 経緯と旅行の目的

1.1 経緯 — AALA 総会記念講演, マレーシア大使館, 日本 AALA 訪問

福井県 AALA では、これまでにキューバ (2007 年), 韓国 (2008 年), 中国 (2009 年), 韓国併合 100 周年国際学術会議参加 (2010 年) 旅行を実施し, AALA の「平和と友好」について勉強してきました. 今回の旅行の計画段階では, 東南アジアの中でインドネシアのバンドンにしようか, マレーシアにしようかと議論していました. 2010 年度の福井県 AALA 総会 (4 月 24 日, 福井県教育センター) において日本 AALA 55 周年記念として, 北出理事が「バンドン精神が世界を動かす — 平和の地域づくりと日本 —」と題した講演を行いました. 引き続き開催された総会で, ASEAN や TAC についてマハティール氏から学びたいとしてマレーシア旅行を計画することにしました.

その 1 ヶ月前に, 私たちはマレーシア留学生からマハティール氏のホームページを紹介されていました. それによれば, マハティール氏は私たちのような市民レベルの団体にも会う用意があると書かれていました. 総会での計画決定段階では実現の可能性は半々なあとと思っていましたが, マハティール氏と面談できるようにしっかりと準備することにしました.

初めに, 日本 AALA を通して, マレーシア大使館 (東京) を訪問し, マハティール氏との面談を申し込むことにしました. 日本 AALA の滝本事務局長と恩田さん (事務局員) がマレーシア大使館と折衝してくれました. お陰さまで北出理事と私が 7 月 27 日にマレーシア大使館



写真 1 ロジアン次席大使 (中央), 北出理事 (左), 筆者 (右)



写真 2 ロジアン次席大使 (中央) と中田祥子さん (通訳・総務課), 筆者 (左)

を訪問し, ロジアン次席大使に会うことができました. ロジアン氏はスーツに身を構えた物腰の柔らかい紳士で, 一見してエリートの外交官とわかりました. 英語通訳は中田祥子さん (総務課) でした. 長身の上品な女性でした. 彼女の母親は武生市出身ということでした.

私たちは, まず, 多忙な中, 地方にある市民レベルの平和と友好の団体のために時間を割いて下さったことに心からのお礼を申しました.

引き続き、私たちの「マレーシア平和と友好の旅」の目的を説明し、マハティール氏にお会いできるように取り計らって下さいとお願いしました。その中で、ロジアン氏から意外にも「マレーシア外務省の副大臣にも会う気はないか？」というご提案を頂きました。ありがたいことから、即座に「お会いしたい」と返答しました。以上が今回の旅行の大きなきっかけとなったのでした。

マレーシア大使館を訪問した日は、本当に暑かったです。大使館と渋谷駅間の距離は徒歩で10数分くらいですが、ビルとコンクリート道路からの照り返しは、熱光線が肌に突き刺さる感じでした。それでも、帰りの私たちは、ロジアン次席大使の誠実な話しぶりから、マハティール氏や外務省副大臣との面談は実現に一步近づいたと感じ、嬉しさを噛みしめながら汗だくのまま渋谷駅まで歩きました。渋谷駅近くのレストランで、昨年の中国旅行で多数の市民から対日感情をヒヤリングするという大活躍した牧野佳奈子さん（フォートジャーナリスト）とおちあい、昼食を共にしました。彼女は熱帯雨林の保護や生物多様性の調査のためボルネオ島に行ったことがあり、マレーシアに深い興味を持っていることを知っていますので、私たちはマレーシア旅行に参加しないかと誘いました。その時はかなり乗り気でしたが、最終的には彼女は都合が付かず、旅行は不参加となり大変残念がっていました。

その後、私たちは新宿へ移動し、日本AALA事務局を訪ねました。あいにく、秋庭専務理事も滝本事務局長も不在でしたが、事務局次長の恩田さんがおられました。私たちは彼女に大使館訪問の口火を切ってくれたことにお礼を述べ、大使館訪問の成果を報告しました。帰り際に、事務局の出口でニカラグワのコーヒー「マラゴジベ」（ブルーマウンティン相当）

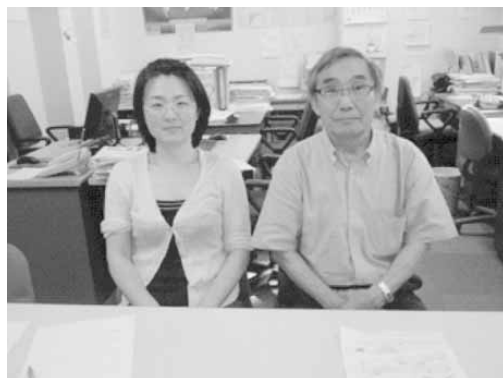


写真3 日本AALA事務局の恩田さんと北出理事

を見つけ、数袋を購入しました。これは本当に香りも味もいいので、毎日楽しんでいます。

1.2 旅行の目的

次の3点を旅行の目的としました。

- ① マレーシア元首相・マハティール氏と面談し、アジアと世界の平和と友好について学習する。
- ② アジアの平和共同体結成（ASEAN, TACを含む）などについてマレーシア外務省で討論し、示唆を受け、学習する。
- ③ マレーシアにおける多様性（民族、宗教、生物、文化など）を見聞し、学習する。

2. 事前学習会

今回も恒例により、海外スタディツアーの事前学習会を2回開催しました。その概要は次の通りです。

2.1 総会での北出理事・記念講演による学習（4月24日）

前述のように、昨年4月24日に福井県AALAの今年度の総会が開催され、北出理事が、「バンドン精神はいま世界を動かすー平和の地域づくりと日本ー」と題して、講演を行いました。そこでは、「バンドン会議ー非同盟運動の源流」の見出しのもとで植民地の独立

(2) 平和 5 原則からバンドン 10 原則へ

• 平和 5 原則 → • バンドン 10 原則 (アジア・アフリカ会議、29 カ国)

- ① 領土保全、
主権の相互尊重
- ② 相互不可侵
- ③ 内政不干渉
- ④ 平等、互恵
- ⑤ 平和的共存



- ① 基本的人権と国連憲章の尊重
- ② 国家主権、領土保全の尊重
- ③ 人種の平等、諸国家の平等
- ④ 内政不干渉
- ⑤ 国連憲章に従う個別的・集团的自衛権の尊重
- ⑥ 集团的防衛機構を大国の利益に用いず、
他国を圧迫しない
- ⑦ 領土保全・政治的独立に侵略、脅迫、力
の行使をしない
- ⑧ 国際紛争は平和的方法で解決
する
- ⑨ 相互利益と協力の促進
- ⑩ 正義と国際的義務の尊重



写真 4 「平和 5 原則」と「バンドン 10 原則」、
北出理事の講演スライドより

と非同盟運動の歴史が、また、平和 5 原則からバンドン 10 原則への発展と、さらに、非同盟諸国首脳会議の発足 (1961 年) に至る経過が述べられました。ASEAN (東南アジア諸国連合) 5 ケ国が 1976 年に調印した TAC (東南アジア友好協力条約) へと発展した経緯を踏まえ、今や、TAC と憲法 9 条によって平和と安全を確保するための東アジア共同体に向かうためにバンドン精神と日本国憲法を活かし、人民レベルの友好と連帯によることが基本であると結論付けられました。この講演によって、今回の「平和と友好」の旅行目的を果たすために必要な基礎知識を得ました。さらに、私は岡倉古志郎の『非同盟運動』(大月書店) を読んで感銘を受けていました。

2.2 事前学習会 (10 月 17 日)

マレーシア旅行の 5 週間前となる 10 月 17 日に福井県教育センターで事前学習会を開催しました。旅行団員の殆ど全員が出席しました。学習会は 4 部構成で、第 1 は山本が、第 2 は北出理事が、第 3 は高坂さん (添乗員) が、第 4 はマレーシア留学生が講師を担当しました。

(1) 山本の解説: 「マハティール元首相との面談に備えて — マハティール・モハマド著 (加藤暁子訳) 『アジアから日本への伝言』を読んで」

筆者は、団長としての簡単な挨拶をしたあと、パワーポイントのスライドを使って掲題の解説を行いました。福井県 AALA の私たちは、既に (9 月)、マレーシア大使館を通してマハティール氏宛に事前質問を送ってありました。4 月以降、私はマハティール氏に関する本を 3 冊買い、事前質問に対する回答を見つけようとして本を読みました。3 冊の本の中に全部の回答が書かれているわけではありませんが、約半分の回答が見つかりました。その Q & A の詳細は割愛しますが、そのパワーポイントスライドの配付資料を本稿とは別に付けておきます。私の解説によって、マハティール氏のルックイースト政策や教育重点の政策 (国家予算の 20% を教育に使う)、産業・経済の振興政策の概要とそれらがどのように成功したが、わかってきました。

(2) 北出理事の解説: 「マレーシア & マハティール」

北出理事は、パワーポイントのスライドを使って、掲題の解説をしました。マレーシアの面積は日本の 90% で、人口は 2,831 万人であること、この国は民族、言語、宗教における「多様性」にあることが紹介されました。マレーシア成立までの歴史や政治の仕組みの説明もありました。また、第 2 次大戦では日本軍による住民 (華僑) の大虐殺が全土で行われたことも知りました。マラッカのポルトガルやオランダによる植民地支配の歴史と遺跡の説明もありました。その中でたくましい商才を発揮して栄えたジョンカー街の寺院やモスクの共存共栄のお話は、見学の意欲を引き起こすものでした。今

度、訪問する外務省の存在する新首都機能都市のプトラジャヤの紹介もありました。特に、面談予定のマハティール元首相が成功させた「プミプトラ政策」や「ルックイースト政策」および TAC が多様性を保障しながら地域の安全を守ることの重要性が力説されました。特に、「世界は軍事同盟解体と非同盟・平和共同体の時代に向かうべき」とする見解には重大な説得力を持っていました。

北出理事の解説によって、今回のスタディツアの学習目的が明確になってきました。

(3) ABSea ツーリスト・高坂さんによる旅行説明

添乗員を務めてくれる高坂さん（女性）による旅行日程の説明、マレーシアでのホテルの名称と場所、出発と帰国の専用バスの発着時間と場所の確認、海外保険の手配と安全上の注意、海外での電話のかけ方、健康管理などの説明がありました。旅行参加者のほとんど全員が高坂さんの説明を聞きました。

(4) マレーシア留学生によるお国紹介

私の講演に続いて、留学生からマレーシアの国紹介をしてもらいました。

たとえば、マレーシア留学生・ショブリ君（機械工学科4年）はマレーシアの地理・歴史、国民、政治・経済などについてスライドを使って説明しました。また、チェン君とハフィズ君は、別々に、風光明媚な観光地や名所旧跡、近代都市のモダンなビル群、おいしいマレー料理、着飾ったマレー美人などを鮮明な写真を使って紹介してくれました。説明を聞いて、旅行が楽しみなって来ました。

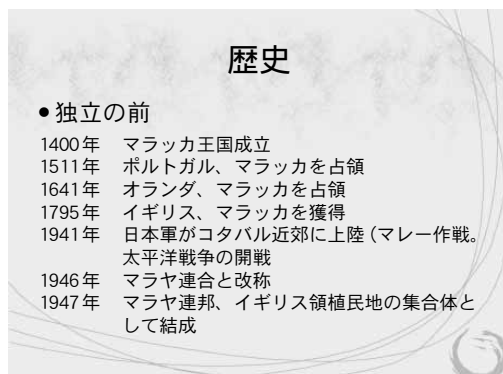


写真5 「マレーシアの歴史」。ショブリ君のスライドより

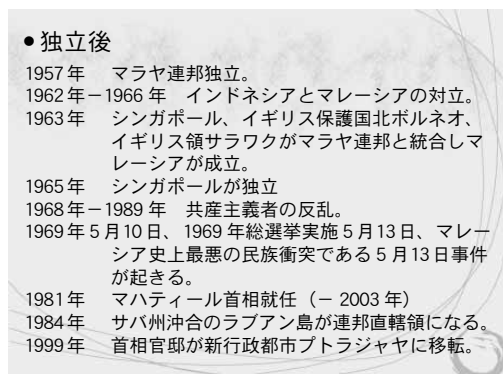


写真6 「独立後のマレーシアの歴史」。ショブリ君のスライドより

2.3 マレーシア留学生との夕食懇談会（10月17日）

事前学習会に引き続き、福井県教育センターでマレーシア留学生6人、および、中国人留学生一人とその日本人付添人一人を囲んで夕食懇談会を開きました。

福井大学には、現在（10月17日）マレーシアからの留学生が33人在学しています。福井大学では、これまでに151人の卒業・修了生を送り出しています。マレーシア留学生は中国人留学生に次ぐ大口のグループです。日本の中でも福井大学はマレーシア留学生の受け入れが多いことで知られています。筆者は、2004年にマレーシアへ留学生

募集フェアに行ったことがあります。その時、数十年前に福井大学を卒業した一人のOBが福井大学のブースに来られ、息子を福井大学に留学させたいという話をされました。

さて、懇談会に来てくれたマレーシア留学生 6 人は、たまたま全員が男子学生でした。彼らは、工学部の 3 年生と 4 年生で、日本に来てから既に 4 年～5 年を経ています。来日後ずっと日本語で授業を受けて来ていますから、日本語能力に問題はなく、私達とのコミュニケーションもスムーズで何も問題がありませんでした。ルックイースト政策の恩恵によりマレーシア政府奨学金を支給されていますので、勉学に支障をきたすほどの無理なアルバイトをする必要はありません。優秀な成績をとって卒業したら日系企業に就職したいとして勉強に励んでいるということでした。中には既に就職が内定した留学生や、大学院進学が決定している留学生もいました。

彼らは、2 名ずつ 3 つのテーブルに分かれて、私たちと一緒に食事をしました。AALA の会員の多くは、自分の子供よりもっと若い留学生を相手に大変楽しいひと時を持つことができました。彼らから留学の目的や苦勞、将来の希望と夢などを聞きました。彼らは非常に元気で頼もしい学生でした。また、帰国後はマレーシ

アの発展に尽くす考えの強いことも印象的でした。なお、彼らのほとんどは、イスラム信者です。全く豚肉を食べませんから、料理には徹底して豚肉を入れないように気を付けました。彼らは刺身や寿司、煮物を好んで食べていました。

以下、イベントを時系列で丸数字の番号を付けて紀行文を綴ることにします。

3. 初日 11 月 19 日 (金) : 日本出国, ソウル経由の大韓航空便, クアラルンプール到着, ガイドのディクソンさん

① 日本出国

クアラルンプール (以下, KL) 往復の直行便は、いろいろ調べたところ関空からも中部からも適当な便がありませんでした。結局ソウル経由の大韓航空機としました。そのため初日と最終日は丸一日を移動に費やしました。筆者は朝 4 時 30 分に起床し、朝食を済ませ、忘れ物がないか荷物を再チェックして、6 時に集合場所の福井大学へ行きました。大学正門の内側では既に、専用バスが到着していて、その前には ABSea ツーリストの白川社長と添乗員の高坂さんが出迎えてくれました。他の参加者数名も遅刻することなく集合し、車を大学構内に駐車しました。

専用バスは、6 時 30 分に大学を出発し、次



写真 7 マレーシア留学生との夕食懇談会。豚肉を全く使わない料理でした。



写真 8 乗り継ぎのひと時を楽しげに過ごす阪下夫妻 (ソウル仁川国際空港で)

の待合場所・鯖江駅東側に向かいました。そこで5名を拾い、次の待合場所の敦賀インターへ行き、さらに4名を拾いました。次の草津インターでも一人を拾いました。

関西空港には予定の11時より少し早く到着しました。関空4階の国際線出発ロビーで最後の一人（大阪在住）とおちあい、首尾よく全員集合となりました。実は、北出氏が空港到着直前になってパスポートを自宅に忘れたことに気づき、彼は専用バスで福井に戻り、結局一日遅れでマレーシアに来ることになりました。

関空を飛び立つとき、私たちは彼を残して、22人でソウル仁川空港に向かいました。

② KL 到着とガイドのディクソンさん

関空 13:30 発 KE724 便はソウル仁川（インチョン）国際空港まで2時間で飛びました。そこで 15:30 発の KE671 便に乗り継ぎました。7時間弱のフライトで 22:40 に KL に到着しました。空港の到着出口にはガイドのディクソンさんが待っていてくれました。長身でスリムな人でした。彼は、東京の日本語専門学校に留学し2年間を過ごしたそうです。その間、日本人学生がよく世話してくれ、一緒にあちこちに旅行したそうです。最近は毎年数回、日本ツア



写真 9 ガイドのディクソンさんは、長身で、日本通の親近感の持てる明るい人でした。（ハデハデの専用バスの中で）

の仕事をしているということでした。彼は、ユーモアもあり、親近感の持てる明るい人でした。その印象は日ごとに高まって行きました。私たちの専用バスは、空港からホテルまで雨の中を約1時間走りました。郊外の高速道路の周囲は暗くて余りよく見えませんでした。赤道直下の南国に来たという感じは確かでした。ガイドさんは、事前にチェックインを代行し、私たちはバスの中で、日本円 5,000 円とディクソンさんが用意してくれたマレーシア・リングギットとを交換し、部屋のカギももらいました。ホテルエクアトリアル（ビジネス中心街にあるデラックスホテル）に着くと、旅行団員はそれぞれの部屋に散って行きました。筆者は旅の疲れもありすぐに眠りに付くことができました。

4. 第2日 11月20日（土）：通訳のローさん、王宮、王立モスク、独立広場、バツ洞窟、天后宮、ワットチェタワン、ツインタワー、留学生同窓会員との夕食懇談会

③ 通訳のローさんとの打ち合わせ

外務省訪問とマハティール元首相との面談では、英語が使われますので、マレーシア人の通訳を雇いました。彼の名はローさんです。朝食時間にホテルに来てもらい、私たちから事前に



写真 10 通訳のローさん（左から2人目）と打ち合わせをする金森理事と筆者。左端は添乗員の高坂さん。（ホテルのレストランで）

マレーシア大使館を通して出している質問書についてその内容の説明を筆者と金森理事が行いました。彼は日本の上智大学国際関係学部を卒業し、日本で8年余り働いた経験があり、日系企業や経済界・産業界での仕事ですが、外務や政治経済についても相当な経験を持っておられました。彼は、私の少し厳しい面接にささか緊張しているように見えたが、堂々としっかりしており、受け答えがしっかりとできましたので、素晴らしい通訳だと思いました。

④ 王宮

最初の市内観光地は、王宮でした。マレーシアでは王様は5年の任期制で、9つの州のスルタンと言われる王家から順番で務めますが、政治の実権はないということでした。現在の王様は国民に大変な人気と信頼があるそうです。王宮の中には入れませんので、門のすきまを通して王宮らしい建物を見ました。王宮の周囲には、宮殿より背の高いビルが建っていますので、そこからは王宮を見降ろすことになり、宮殿の敷地内も丸見えとなります。何か不都合がないかと思われそうですが、そのようなことはどうもおおらかに見過ごされているようでした。

正門の右わきのボックスには、派手な赤い軍



写真 11 王宮の衛兵と馬。この馬はなでられると顔を寄せてくるほど人間を信頼していました。左から服部さん、雁子さん、金森さん、重野さん、辻さん。



写真 12 直立不動の衛兵の前で。山本敏雄夫妻。

服を着た衛兵が馬にまたがっていました。馬は人間を信頼しているようで、触られてもいやがることもなく頬ずりするように首を振っていました。他のボックスには白い軍服を着、腰に布を巻きつけた衛兵が銃を下げて直立していました。ガイドさんの話によれば、暑い日には、訓練を受けた彼らでも、直立不動の姿勢に耐えられず、熱射病のためでしょうか、ぶっ倒れることがあるそうです。

⑤ 王立モスク

マレーシアでは、国教がイスラム教であり、国民の2/3がマレー系でイスラム信者が多いため、王立モスクがあります。

私たちは、王立モスクの建物の中に入ることができましたが、礼拝堂（本堂というのかどうか知りませんが）には入りませんでした。まず、王立モスクの建物の玄関（本当はどのようなかわかりませんが）で、靴を脱ぎ裸足になりました。男性は、帽子をとるだけでよいのです。



写真 13 王立モスク内の礼拝堂の前で、イスラム衣装に身を包んで立ち、アラーの神様からの恵みを両手で頂く格好をする旅行団の女性たち。



写真 14 元クリケット競技場だったグリーンの広場で独立宣言がなされた。向こう側の赤い屋根の建物は迎賓館と聞いた。後ろの高層ビルは、独立広場の外のもの。

が、女性は、頭と体をひとつなぎの青い服ですっぽり包みました。モスクは風通しの良い構造になっていますが、それでもその服装をまとった女性たちは、かなり暑苦しかったと言っていました。イスラム教では、凶肖や偶像表現が禁止されています。礼拝堂の中で礼拝の方向を示す部分だけはひときわ目立つ装飾が施されていました。他は簡素に見えました。床は広々としていて、全面カーペットが敷かれていました。ここで大勢の信者がメッカに向かってお祈りをしますが、私たちが見学した時間帯は、一日 5 回あるお祈りの時間のいずれでもなかったもので、お祈りの様子は見られませんでした。

⑥ 独立広場

独立広場に着くと、芝生のグラウンドと、その道路の向かい側にある英国風の時計塔を備えた建物（旧連邦事務局ビル・現在は最高裁判所）が目に入ります。グラウンドは、イギリス統治時代（1786～1957 年）のクリケット競技場でした。ここで、1957 年にマレーシアの独立宣言が行われ、毎年独立記念日の祝典が開かれていると聞きました。グラウンドに沿って煉瓦造りの迎賓館があり、その前の国旗掲揚塔では

マレーシア国旗が翻っていました。それらに隣接して国会議事堂もありました。それらを見て、現在のマレーシアは、列強国に隷属することなく、ちゃんとした独立国家として、自力で発展する国であると感じました。一方、日本には、日米安保があり独立とは名ばかりです。日本人には自主・独立の意識もなければ、独立闘争の経験也没有せん。ガイドさんの国を愛し、誇りに満ちた説明を、私は羨ましいとさえ思っていました。

⑦ バツ洞窟

KL から北へバスで 20 分くらい行くと、ヒンズー教の聖地であるバツ洞窟に到着します。272 段の階段を上ると、大きな洞窟に着きます。洞窟は広くて高さも 100m 位あると聞きました。中には祭壇がありますが、公開されている部分より、非公開部分の方が広いらしいです。世界中からヒンズー教の信者だけでなく、多くの観光客が来ていました。暑い中で長い階段を上り下りしたので、下りて来た時は本当に喉が渇いていました。商売熱心なマレー人が冷やしたココナツの実を売っていました。私は一つ買いました。その場で、店員がココナツの実



写真 15 バツ洞窟の前に立つ磯辺さんと雁子さん。272 段の階段の前の門にはヒンズーの神々の像が置かれていました。

をナイフで切って開いてくれます。ストローでジュースを飲みました。それは、あっさりした甘みがあり、実 1 個で十分な量がありました。十分満足できました。

⑧ 天后宮（中国仏教）

マレーシア国民のうち、華人は約 1/4 で、そのほとんどは仏教信者です。

私たちが見学したのは最大のお寺である天后宮でした。中に入ると、まず金ぴかの大小複数の仏像が目にとまりました。天井が高く素晴らしい装飾がなされていました。また、参拝者も多く、熱心な信者がお祈りを奉げているのが印象的でした。蠟燭や線香が飛ぶように売っていました。お祈りの仕方は、確かに中国や台湾で見たのと同じように見えました。相当たくさんの寄金があるのだろうと、私はげすの勘繰りをしてしまいました。

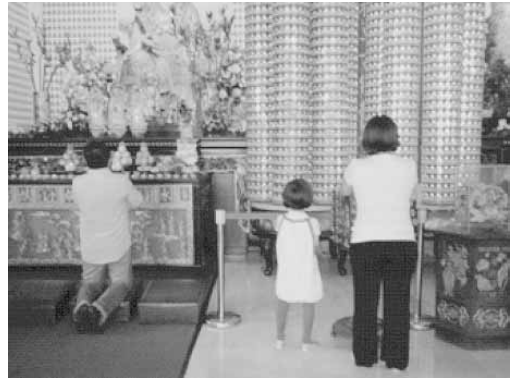


写真 16 天后宮の内部は金ぴかで、熱心な華人の信者がお祈りをしていました。



写真 17 20 日のお昼はインド料理でした。鶏肉と豆の料理、カレー、ナンと焼き飯などが出ました。おいしかったです。



写真 18 ワットチェタワン（タイ仏教寺院）の内部は金ぴか。お祈りをする信者（右下）とガイドの説明を聞く旅行団員

⑨ ワットチェタワン (タイ仏教)

ワットチェタワン (タイ仏教寺院) は、とがった三角屋根と内部の仏像がいずれも金ぴかが特徴でした。数年前にタイでみた寺院と同じ造りでした。ここでも熱心な信者が親子で参拝していました。

⑩ ツインタワー

KL のシンボルであるツインタワーは、地上 88 階建て、452 m の高さがあります。ツインタワーとしては世界で一番高いそうです。二つの建物の 41 階は渡り廊下でつながっています。両方ともイスラム教の「5 柱」からインスピレーションを得た近代イスラム建築で、ふんだんにステンレス鋼が使われています。内部の低層階には最新のファッションや流行を取り入れた店舗やレストランなどが入っていました。私はぶらぶらしながら、マレーシア人の強い購買意欲や、活発な動きや明るさを感じとりました。それに比べ日本人はむやみやたらと仕事に追まわれ、忙殺されているだけのようには思いません。



写真 19 KL の夜景。左は KL のシンボルであるツインタワー。右はテレビ塔。(留学生・ハフズ君のスライドより)

⑪ 留学生同窓会員との夕食懇談会

福井大学には、全国的に珍しくまた注目され



写真 20 マレーシア留学生同窓会夕食懇談会の前に撮った記念写真 (宿泊中のホテルエクアトリアルロビーで)

ている組織として留学生同窓会があります。マレーシアにはその支部があります。今回の旅行では留学生同窓会員 5 人を招待して、夕食懇談会を開催しました。参加してくれたのは、イルワン君、アザさん (その妻)、アシル君、リナさん、ディアナさん、ディアナさんのお母さん、イルワン君の娘さん (2 歳 8 ヶ月、5 ヶ月) の合計 8 人でした。

彼らは、指定した時間より早めに集まってくれました。連絡の窓口を務めてくれたイルワン君 (副会長) は筆者のエネルギー変換工学の講義を受けた一人で、試験の出来が最高点でした。彼が家族を連れて参加してくれ、再会できたことは本当に嬉しく思いました。宿泊ホテルのロビーで全員がそろった記念写真を撮りました。夕食懇談会は 6 時から宿泊ホテルの中のレストランで始まりました。

丸テーブル 3 卓に留学生が 2 人ずつ付きました。留学の目的、留学中の苦労や楽しかったこと、帰国後の活躍などが話題でした。彼らは、マハティールのルックイースト政策の一環として、マレーシア政府奨学金を得て日本に留学しました。彼らはエリートとして、若くして責任ある地位に就けますが、マハティールの偉大な教育政策に心底感謝していました。彼らは、母

国のためにしっかり働き、マレーシアの産業・経済発展に貢献していることを大変誇りに思っていました。マハティールは、いみじくも若者には目標を与えるべきだと言っているのですが、マレーシアの若者は彼の言葉を実行され、成果を挙げています。これは素晴らしいことです。翻って私は日本の若者にも目標を持たせるべきだと思いました。

懇談会での食事は、マレー料理のバイキング式でした。彼らは全員イスラム信者ですので、酒類を飲みませんが、私たちが酒を飲んでも構わないという文化です。マハティールも外交の席ではそうしてきたそうです。それで、私たちは遠慮なくビールやワインを注文しました。

各テーブルは大変な盛り上がりを見せていました。懇談会の席で彼らは私たちの一人ひとりに記念品を配ってくれました。こちらからは、翌日でしたが、原爆被災の写真集を代表のイルワン君に手渡しました。私たち AALA の世界の平和と友好のための活動と核兵器廃絶の平和運動について彼らの理解と協力を求めました。

⑫ 北出理事の KL 空港出迎え

懇親会の後、私と高坂さんは、KL 空港へ一日遅れの北出理事を迎えに行きました。ディク

ソンさんの所属する旅行社のティー社長が車を出し運転してくれました。彼もまたルックイースト政策の支援を得て日本に留学した一人でした。日本語が極めて達者な人で、観光業だけでなく、政治・経済・産業の各分野について広く深い知識を持っていました。北出理事はややお疲れのようすでしたが、ホテルに向かう車中ではティーさんと大声で話合っていました。彼が加わることで翌日からの旅が一層楽しみとなりました。

5. 第 3 日 11 月 21 日 (日) : マラッカ観光 (ジョンカー街, 青雲亭寺院, オランダ広場, マラッカ教会, セントポール丘, サンティアゴ砦, ポルトガル広場, ババニョニャ食事), KL での民族舞踊ショー

⑬ ジョンカー街

私たちの専用バスは、朝 8:30 発にマラッカ (地図によっては、メラカと書かれている) に向かってホテルを出発しました。高速道路の両側には至る所に広大なパームヤシの林がありました。実を食用にするため、植林しているのです。話によれば、パームヤシのジャングルでは、ヤシの木が整然としていてどこもかしこも同じにしか見えないため、道しるべがないと迷子に



写真 21 留学生同窓会副会長のイルワン君とその家族。左はディアナさん。(同ホテルのロビーで)



写真 22 後ろにパームヤシ畑が見える高速道路の休憩所で一休み。左から北出さん、阪下さん、岸山さん、野波さん。

なり、ジャングルからもう出られないということでした。また、大蛇や毒蛇がいて、極めて危険だそうです。

専用バスがマラッカのジョンカー街に着いたのは、10 時ころでした。ここは、旧市街のチャイナタウンにあり、特に金土日の夜にジョンカーastreetに立つ夜店が有名で大変な賑わいとなるそうです。この日は日曜日でしたから、昼間からたくさん観光客が狭い街路を行き交っていました。華人が多いのですが、マレー人、インドの人、西洋人など多くの人種の人が歩いていました。間口の小さい店や屋台の店が林立し、服飾雑貨品、マラッカの手工芸品などのお土産物が売られていました。少し奥まったところに公然と生きた鶏をさばく屠殺場がありました。その中では、たくさんの鶏が籠に入られていました。私たちは、幸か不幸か、屠殺の現場を見ずじまいでした。

⑭ 青雲亭寺院とモスク

華人たちの青雲亭寺院は、門も屋根もいろいろな偶像物が配置されていました。建物の中は、日本の寺とはかなり違いますが、いかにも仏教のお寺と言う感じでした。ここでも信心深い人が参拝していて、経典を見ながら読経している人もいました。建物の周囲にある建物の中には



写真 23 青雲亭寺院の屋根には多くの偶像が配置されていました。



写真 24 イスラムのモスクの前で。左から田中さん、磯辺さん、雁子さん。

たくさんの位牌が置かれていました。それらには、俗名が書かれ故人の写真が付いていて、習慣の違いを感じました。

青雲亭寺院から少し歩くと、イスラム信者のためのモスクがあり、さらに行くとヒンズー教の寺院がありました。それらは、ほとんど並んでいると言って良いくらい近くにあるのです。まさしく宗教の多様性の中で、宗教的な争いなどもなく平和共存していることが実感できました。

⑮ オランダ広場、セントポール丘、セントポール教会

ジョンカーastreetを通り抜けて、幅 20m 足らずの川をまたぐ橋を越えたところがオランダ広場でした。まず噴水が目にとまりました。広場にはキリスト教会がありました。赤っぽい煉瓦造りでした。中では日曜日のミサが行われていました。教会に向かって右側は、植民



写真 25 セントポール丘から見たマラッカ海峡と市街地。かすかに海峡を通過する複数の石油タンカー見えます。

地時代の刑務所だったと聞きました。それも赤っぽい煉瓦色でした。そこは、土産物屋で埋まっていた。その周囲には屋台の店もいっぱいありました。旅行団員は家族や友人らへの土産を買っていました。広場から階段を上がると歴史博物館がありましたが、今回はその中に入らず、まずセントポール丘の中腹にある台地に行きました。そこには、大きな木が立っていました。ディクソンさんの説明を聞き洩らしたのですが、それはマラッカの歴史に関わる由緒ある木のようなのでした。

セントポール丘からはマラッカ海峡と市街地が一望できました。大変美しい景色でした。帆船を使った海洋博物館も見えました。海峡には石油タンカーが複数見えました。日本に運ぶ石油タンカーは前方のタンカーが見えるほどの距離でつながっていると聞いていました。確かにそのように見えました。日本では、その石油を全部燃やしてしまうのですから、日本列島を宇宙船から見れば火だるま状態に見えるそうです。人々は汚染された空気の中で生きているのだと思いました。

丘の頂上には宣教師フランシスコ・ザビエルの像とセントポール教会が立っていました。その教会が落成する前にフ宣教師が亡くなったた



写真 26 丘の頂上にあるセントポール教会とフランシスコ・ザビエルの像。

め、ついに屋根が付かないまま放置されてきたと聞きました。しかし、教会の中にはフ宣教師の墓と共に、難破した船と共に亡くなった人たちの墓もありました。墓はいずれも石でできていました。

⑩ サンティエゴ砦、ポルトガル広場

セントポール教会のある頂上から長い階段を降りて平地に着いたところにサンティエゴ砦があります。それはポルトガルがオランダと闘った時のマラッカ領有地の要塞としての砦でした。今はさびれて、小さな門のように見えました。

サンティエゴ砦の対面には、マラッカ独立宣言記念館がありましたが、そこの見学はしませんでした。ガイドさんの話では、その辺りで、第2次世界大戦中に日本軍が華人をたくさん集め、虐殺をしたそうです。また、マラッカの隣のジョホール州でも大規模な華人虐殺が行われたということでした。日本軍の言い分は、華人たちはみんな中国共産党員とか党の支援者であるということだったそうです。この問題について時たまガイドさんが話することがあると、被害者の関係者が睨みつけて来ることがあるということでした。

次に、ポルトガル広場に行きましたが、特に

印象が残っていません。ただ、広場の海岸は生活廃棄物が散らかっていて、ひどく汚れていました。そこで飛び跳ねていたムツゴロウがかわいそうでした。

⑪ ババニョニャ料理

21 日の昼ごはんは、ポルトガル広場に近いところにあるレストランで、ババニョニャ料理でした。ババニョニャとは数百年前に移り住んできた男性華人（ババ）と彼らと結婚した現地のマレー人女性（ニョニャ）の混血の子孫のことらしいです。彼らは双方の文化を融合して行きました。彼らの作ってきた家庭料理がババニョニャ料理と言われます。私たちが頂いたのは、ココナツミルク味のカレー、鶏の甘辛煮、魚介類などでしたが、いずれも各種の香辛料が使われていました。

激辛でなかったのは、多分外国人向けの味付けになっていたのでしょう。おいしくて高カロリーですから、マレーシア人に太った人が多いということでした。

そのレストランには、通訳を務めてくれるローさんが息子さん（小学 6 年生くらい）を連れて、挨拶に来てくれました。

なお、食事の後トイレにたち、イスラム式のお尻洗浄用のノズル付きホースを発見し、経験



写真 27 ババニョニャ料理はカレー味でおいしいが、太りやすいそうです。

のため使ってみました。それなりに結構なものでした。

食事の後、私たちは土産物屋に行きました。店員はみな日本語を話し、上手に売り込んできました。私はカレー粉、胡椒、干しマンゴーを買いました。旅行団員の中には袋いっぱいにお土産を買った人もいました。みなさんご機嫌でした。

⑫ 民族舞踊ショー

私たちの専用バスは、マラッカから高速道路を走ってKLに戻りました。途中、大きな休憩所に入りました。私は冷えたマンゴージュースを飲みました。たくさんの人が飲んだり食べたりしていました。駐車場に隣接してパームヤシの林がありました。よく見るとたくさんの実がたわわに付いていました。一本の木から結構な収入が得られると聞きました。

民族舞踊ショーの会場はツインタワーのそばにありました。舞踊ショーが始まる 6 時まで公園のベンチで待機しました。中は、観光客でいっぱいとなりました。いろいろな種類のマレー料理が周囲に並んでいました。バイキング型ですので、各自が好きなものを取って来て食べました。ビールとワインは各自払いです。いよいよ民族舞踊ショーが始まりました。男女 6 人ずつ 12 名のダンサーがいろいろな民族衣装に着替えて、踊りを繰り広げました。女性のボディアクションは、激しくなかなかセクシーでしたが、それなりに上品でした。よく観察していると、踊りの中央にいる人がどうもリーダーらしく、鮮やかな踊りを見せていました。南国らしい衣装は、いずれもけばけばしいほどのいろどりでした。歌を歌った人もいました。つややかないい声でした。司会者は民族衣装を着た男性で、英語を話していました。私には聞きとりにくい発音とアクセントでしたが、彼は一生懸命



写真 28 舞台上がりバンブーダンスを楽しんだ敏雄君。左のプロダンサーがリズムとステップを教えてくださいました。

に盛り上げようと努めていました。

ショウの終わりには、会場のお客をステージに引っ張り出して、バンブーダンスを始めることになりました。ショウダンサーがお客の手を取って、リズムとステップを教え、竹なしで数回練習をします。その後、本番です。男性2人が向き合って2本の竹を音楽に合わせてぱちぱちと打ち鳴らします。タイミングを見て、ダンサーとお客が手を取り合ったままステップを踏みます。約十人がトライしました。失敗して竹に脚を挟まれる人は一人もいませんでした。成功した本人はもちろん会場のお客も大満足の拍手喝さいでした。私たちの旅行団からも一人がトライし、大いに楽しんだのでした。

6. 第4日 11月22日(月)：マレーシア外務省訪問、マハティール元首相面談、打ち上げ夕食会

①9 マレーシア外務省訪問

(1) 外務省到着

第4日は、いよいよ私たちの旅行の主目的を果たす日です。皆さんは男女ともちゃんと正装して出かけました。

専用バスは、朝のラッシュを考慮して早めの8:00にホテルを出発しました。新行政都市ブ

トラジャヤまでKLから小1時間のドライブでした。少し早く着いたので、マハティール元首相が在職中に官邸からいつでも参拝できるようにと建てた王立モスクに寄り、一休みしました。モスクの中に入る時間はありませんでしたから、ガイドさんから説明を聞いただけでした。そのモスクは大変立派な建物ですが、次の首相はそのモスクにはめったに参拝しないと聞きました。いずこも、権力者は前任者と違うことをしたがる点で似ているなあと思いました。

専用バスがマレーシア外務省のある Wisma Putra に到着したのは、約束の10時より少し前でした。正面のゲートが開き、私たちはバスに乗ったまま到着ロビー玄関前まで進みました。外務省の高級職員たちが到着ロビーで待っていて下さいました。ロビーの壁には歴代の首相の顔写真が飾られていました。もちろん、マハティール元首相の写真もありました。これまで何回もメールで打ち合わせの相手を務めて下さった Abang Sardon Hashim・広報局主任(以下、サルドンさん)が名乗り出て、私たちを講堂へと案内して下さいました。それは、国際会議を行う階段状のホールで、200人位を収容できるものでした。

講堂に入ってから北出理事と私がサルドンさん、Thomas Rainor Ralon・広報部長(以



写真 29 外務副大臣 Kohilan Pillay さん(右2)に原爆被災写真集を手渡しました。左から北出理事、筆者、岸山理事。

下、トーマスさん)、YM Raja Nushirwan・ASEAN - Malaysia 国家書記局副部長(以下、ヌシルワンさん)らと名刺交換し、挨拶を交わしました。その際、通訳のローさんがテキパキと手伝ってくれました。その後、大使館の中では全てが英語で話されましたので、ローさんの貢献は本当に大きかったです。

(2) 外務副大臣の Kohilan Pillay さん(上院議員)を表敬訪問

サルドンさんが Kohilan Pillay・外務副大臣(上院議員)を表敬訪問しようと言われました。早速私たち AALA の会員 10 人が副大臣室に入りました。副大臣は、長身でインド系の物腰の柔らかい人でした。既に私たち AALA の活動や訪問目的を十分承知していました。私たちは、出されたコーヒーを頂きながら、まず外務省に招待して頂いたことのお礼を述べ、次に事前質問に対する回答を聞かせて頂くことに大きな期待をしていると申しました。彼は、日本に学ぶことは多いし、2020 年には工業先進国を目指していると述べ、マレーシアの ASEAN 活動のリーダーの役割の勉強だけでなく、観光旅行も十分楽しんで下さいと申されました。

表敬訪問中の対話は、岸山理事がノートに記録しました。同理事はその後マハティール面談までずっと記録を取りました。それらは貴重な資料になりますので、別綴りの冊子体に入れておきます。

(3) 外務省高官による講演と討論

外務省高官による講演は、外務副大臣の表敬訪問の後の 10:20 から始まりました。場所は講堂でした。司会は最初から最後までサルドンさんが務めました。



写真 30 歓迎のあいさつをされた Thomas Rainor Ralon・広報部長

(i) トーマス広報部長の歓迎挨拶

最初に歓迎のあいさつをされたのは、トーマスさんでした。10 分くらいのスピーチでした。その要点は次の通りです。

(a) 福井県 AALA の質問に賛同する。

(b) マレーシアは ASEAN の中で重要な役割を果たしている。

(c) 1957 年から日本マレーシア関連の両国の友好関係は親密で我々にはありがたい。

(d) 両国間の関係をつくるには市民レベルの活動も重要である。

続いて、ビデオ上映がありました。その題目は「Wisma Putra ― 外交が継承したもの」で、マレーシアの独立以降の外交の足跡と今日の発展を見せていました。上映中、ローさんが要点を日本語で説明してくれました。



写真 31 事前質問の概要を述べ回答依頼の挨拶をする北出理事。

(ii) ビデオ上映「Wisma - Putra — 外交が継承したもの」

講堂の正面にはビデオスクリーンがあり、「福井県 AALA 歓迎」と書かれているのを見て、温かい歓迎に感動しました。掲題のビデオ上映は約 10 分間でした。1957 年の初代首相・ラーマン（スルタンの王であった人で、独立運動のリーダーでした。彼は、建国の父と言われています。）による独立宣言、1971 年のフリーダム宣言、1970 年代・ASEAN 領域の活動が活発化し、経済基盤を作り、マハティール首相による外交本位とルックイースト政策、80 年代・外国の投資を活発にした。マレーシアの外交ポリシーとグローバルな国民の一員としての活躍、エネルギー経済発展、その中で国内の発展に寄与、エコノミックプレイヤー、外務省は重要な役割 - 外交政策を紹介した。

(iii) ヌシルワン ASEAN - Malaysia 国家書記局副部長の解説講演

ヌシルワンさんが「平和なアジアの迫り」と題して、私たちの事前質問に対する回答としての講演をしました。それは、基本的に私たちの見解に同調していましたが、新しい見解が加えられ、大変参考になりました。講演の要点は、概略次の通りです。



写真 32 事前質問に対する回答講演をされた YM Raja Nushirwan・ASEAN-Malaysia 国家書記局副部長（講堂で）

(a) 東南アジアは活発な発展をしている。40 年前には今日の隆盛を誰も想像もしなかった。

(b) ASEAN（東南アジア諸国連合）は Vision をひとつに束ねるというコンセプトのもとでようやくできた。

(c) ASEAN の場から東南アジアの発展は世界に貢献。世界中の半分の輸送が東南アジアの海を通っている。地域の安定がグローバルな貿易に重要である。

(d) 1967 年 ASEAN を 5 カ国で設立した。今は 10 カ国から成っている。

(e) ASEAN の始まりのバンコク宣言では、7 つの重要な目標があった

(f) 2015 年 ASEAN の領域は更に発展する。ASEAN Community では、1 つ、政治的な保障、2 つ、経済的なコミュニティ、3 つ、文化のコミュニティを。

(g) ASEAN Community に対して日本の



写真 33 福井県特産品の眼鏡（サングラス）20 枚を記念品としてトマス広報部長に贈呈しました。

さらなる協力が必要である。

ヌシルワンさんの講演は約 30 分ほどでしたが、質問に対する回答が要点を抑えていて私たちは大いに勉強になりました。また、ローさんは、外交用語を含む広い範囲の専門用語を短期間に習得して、テキパキと通訳してくれました。そのおかげで私たちはノートを取りやすかったし、理解もしやすかった次第です。

（4）討論

講演の後、フロアからの質問を受け討論の時間となりました。2 人の団員が追加質問に立ちました。その一つは、資本主義の発展が環境を破壊することのないように、環境と生物資源の保存・保全をどうするかという質問でした。そ



写真 34 環境と生物資源の保存・保全について質問する野波さん。

れに対する回答は、マレーシアは恐竜絶滅の氷河期でも森を絶やさなかったことを誇りにしており、現在政策として国有地の 60－70%を永久永遠の森として保存・保全すると決めているということでした。また、マレーシアの生物多様性は他の国の生物多様性と共有できるとして、そのことの重要性を訴えておりました。

（5）記念品贈呈

マレーシア外務省・トマス広報部長から私たち旅行団の全員が頂いた記念品はキーホルダーでした。国家のシンボルマークが描かれ、マレーシア外務省と書かれていました。いずれもいわゆるきれいな電着塗装仕上げでした。それらは、刻印でもメッキでもありませんので、いささか塗装が剥がれやすいものでしたが、素晴らしい記念品を頂き、大事に保存したいと思っています。

福井県 AALA からは返礼として福井県特産品である眼鏡（サングラス）男女各 10 個分をトマス部長に手渡しました。嬉しそうに受け取って頂きました。平生、プレゼントを準備するときは難しい思いをするものですが、今回は年中真夏の南国で喜ばれるものとしてサングラスを選びました。それにはさして手間がかかりませんでした。贈呈した眼鏡は鯖江のシャルマン・堀川馨会長から特別に寄贈して頂いたもので、最新の形状記憶合金を使った最高級品でした。ここに記して同会長に深甚の謝意を表します。

（6）全体写真

外務省講堂での行事が全て終了してから、私たちはトマス広報部長とヌシルワン ASEAN - Malaysia 国家書記局副部長に加わってもらって、全体記念写真を撮りました。撮影は外務省広報部専任のカメラマンでした。ここに記して写真提供に謝意を表します。



写真 35 旅行団員 23 人, ヌシルワン副部長(左 1) とトーマス部長(右 3) ちと外務省講堂で撮った全体写真.

(7) 招待昼食会

12:15 から私たちは外務省内の VIP 室多目的ホールでの昼食会に招待されるという栄誉を受けました. トーマス部長他数名の外務省スタッフが同席してくれました. 中には日本語を話す女性職員がいて, その席では素晴らしい交流ができていました. 料理は, マレー料理でした. 上品で素晴らしくおいしい料理でした. 私がトーマス部長に「今までに市民レベルの団体がこのような昼食会に招待されるのは何回目ですか?」とたずねましたところ, 今回が 20 回目目だということでした. そのうちの 1 回に私たち福井県 AALA がかわることができました.



写真 36 VIP 室での招待昼食会. この席では日本語で交流できました.



写真 37 マレーシアのシンボル・ツインタワー (左) の 84 階で待機した時に撮影した KL 市街. 他の高層ビルも低く見えました.

② マハティール元首相との面談

(1) 面談会場到着

マ氏面談会場は 88 階建てのツインタワー (KL 市内) の 86 階にありました. そこでは厳重なセキュリティを通過しなければなりません. 北出理事の臨機応変な手配によってマ氏の秘書官が 1 階まで出迎えに来てくれましたので, 私たちは順調に会場に行くことができました. それでも, 3 回 (1 階, 42 階, 84 階) 待機し, 全部で 40 分ほどかかりました.

ツインタワーはマ氏が首相の時に建てられたもので, マレーシアのシンボルとなっています. 3 回目の待機場所 (84 階) まで上がりますと, KL 市街の殆どが見渡せました. 通訳のローさんもガイドのディクソンさんも初めて 84 階に上がったそうです. 彼らは, 地理がよくわかっていますから, 上から市街地を見て王立モスク, 王宮や国会議事堂などの位置を詳しく説明してくれました.

(2) マ氏に福井県特産の眼鏡を贈呈

マ氏が面談会場に入って来られたのは, 約束の 3 時ぴったりでした. 私たちは拍手で出迎えました. 既に, いろいろな本やネット情報から彼の顔を知っていますが, 実物は 85 歳とは思



写真 38 マ氏に福井特産の眼鏡をプレゼントする。右からマ氏、北出理事、筆者、通訳のローさん（ツインタワー 86 階で）。



写真 40 私たちの質問に対してにこやかに回答されるマ氏。

られました。まさしくご満悦でした。



写真 39 贈呈された眼鏡をかけてご満悦のマ氏。まず掛け心地がよく、デザインも色も気に入ったそうです。

われないほど若くスマートに見えました。大変なハンサムで威圧感のない優しい感じの人でした。

私たちは、挨拶の後、すぐに福井特産の眼鏡を二つ贈呈しました。外務省でプレゼントしたものはサングラスですが、マ氏には近眼（老眼）用でした。

両方とも最新の形状記憶合金のシャルマンの独自のブランドものでした。早速、マ氏に眼鏡をかけてもらい写真を撮らせてもらいたいとお願いましたところ、気軽に応じて下さいました。二つとも軽くてしなりがよく、かけた感じも柔らかく、大変気に入ったとおっしゃってお

（3）マ氏のお話

（i）AALA の活動について

まず、AALA の活動についてどうお考えかとお訪ねしましたところ、「AALA は一番いい活動をしている。有意義だ。ルックイースト政策は有効な政策だ。マレーシアは、もっとたくさんの学生を送りたい。日本に対してマレーシア国内に大学を設けるよう要請中である。イギリス、オーストラリアは既に作ってある。日本もマレーシアに日本語で教える大学を作れば、AALA の目的に沿い、大いに役立つ」と言う回答を頂きました。私たちの活動についてお褒めにあずかり元気もらいました。特に、日本語だけで授業をする大学を作りたいというご提案には、筆者は驚くと共に何とか協力したいものだと感じました。

（ii）ASEAN について

北出理事が「ASEAN の多様性、民族、文化、政治体制など、とくに政治体制はベトナムと違いがあるのに、今共同で発展している。今、いちばん何をお考えか？」と質問しました。その回答は、「ASEAN をもっと理解するには、もっと多くの ASEAN の人が日本に、日本から

ASEAN に来て共通理解することだ。ASEAN も日本からの投資に頼っている部分で、エンジニアリング知識技術を伝承することになる。ASEAN の発展は、日本からの投資を得て、文化を学ぶ。特に日本の価値観のシステムを学びたい」ということでした。ここでも、AALA の活動に期待していると言われました。

(iii) 非同盟の役割について

この件について私たちから「軍事同盟に縛られず自由と平和を実現したい。アジアの平和のために、私たちにサジェスションを求めました。マ氏の回答は、「周辺の国と振り返ると、何かの戦争に関わっている。過去を見る必要はあるが、過去をたくさん影響させてはいけません。過去の歴史をある程度にしておいて、未来の関係をつくる。周りの国と何かの問題、紛争があったら、国際法廷に持って行く。日米同盟だが、アメリカの立場で中国を永久の敵とさせている。日本が中国を敵だと思うと、中国も日本に対抗するために軍事施設を増強する。すると日本も増強する。さらにまた、中国も増強する。そうなると両国間が緊張し、戦争のきっかけになる。戦争をしなければ他のこと、特に教育にお金をかけることができる」ということでした。



写真 41 面談会の後で、マ氏（中央）を挟んで撮った記念写真。右は北出理事、左は筆者。

(iv) 日韓馬合同音楽会の開催について

私たちから「日本・韓国・マレーシアの文化交流として、マレーシアで音楽会を開催できないか？」と提案しましたところ、マ氏は「マレーシアにも優れたオーケストラがある。今は、具体的には答えられないが、よい提案なので、今度連絡します」と言って、筆者の連絡先を控えられました。合同音楽会はかなり実現性が高いと思われました。早速、今回の旅行団の中から「合同音楽会が実現すればまたマレーシアにきたい」という話が出ました。

(v) 面談の終わりに

面談を終えるにあたり、マ氏と私たちは、「今までマレーシアは、日本に学んできたが、これからは、ASEAN、日本、韓国、中国がアジアの共同体として活動して行くべきだ」と言う点で意見の一致を見ることができたと思いました。

最後に、筆者が「マハティールさんがいつまでもお元気で、今後とも世界平和にご尽力されますように祈念します」、あわせて、「私たちは今日大きな勇気を頂きましたので、ますます AALA の活動に励んで行きたい」と締めくくりました。

会場を去る時、ローさんとディクソンさんが、



写真 42 面談の後、マ氏を囲んでとった全体記念写真（ツインタワー 86 階で）。市民レベルの旅行団としては新記録か？



写真 43 ローさん（通訳）はマ氏に自分の今日あるのはluckiest政策のお陰であると感謝し感激していました。

別々でしたが、マ氏に対して、luckiest政策のお陰で今日の活動ができると、握手と求めつつ、感謝し感激していました。その様子から、マ氏は国民から深く尊敬されていることがよく理解できました。

面談会を終えて、私たちは主目的を果たした満足感に浸りながら、まるで雲の上のような高層階からエレベータを降り地上に戻りました。

その後、夕食会まで時間がありましたので、私たちはツインタワー内でショッピングをしたり、コーヒーを飲んだりしました。

⑪ 打ち上げ夕食会

打ち上げ夕食会は、広東料理店で開かれました。甘いおなじみの料理でした。ワインやビールを注文しました。最後の晩餐ですので、各自が数分ずつ旅行の感想や所見を発表しました。ここでは、一人ずつのお話を紹介することはできませんが、「マ氏には日本の総理大臣になってもらいたい」、「マ氏はノーベル平和賞に値する」などのご意見は、的を得ていて面白いと思いました。また、マレーシアの産業や経済が急速に発展を遂げている様子や、人々の活気を直に感じ取ることできたという感想がありました。夕食会は大変な盛り上がりでした。



写真 44 打ち上げ夕食会で旅行の感想を述べる服部さん。うしろは左から磯辺さん、梅木さん、雁子さん。



写真 45 打ち上げ夕食会で旅行の成功を喜び、総括を述べる北出理事（広東料理店で）。

多少、ほろ酔い加減で私たちがレストランを出たのは9時過ぎでした。

7. 第5日：帰国

私たちは、専用バスでKL空港に着く前に、ディクソンさんと運転手の心ばかりのお礼を差し上げました。お二人とも喜んで受け取ってくれました。特に運転手さんは嬉しそうでした。お二人には本当にお世話になりました。お陰さまで良い思い出ができました。

空港ではチェックインも順調に進み、出発ロビーの方に入りました。免税店で土産を買っ

たり、飲み物を飲んだりしました。

復路も大韓航空機を使いました。KL 空港出発は 23:59 でした。ソウルまでは機中泊でした。関西空港に着いたのは定刻通りの 23 日の 11:20 でした。私たちは出迎えてくれた専用バスで福井に向かいました。途中、草津で一人、敦賀で 4 人、と、鯖江で 5 人が下車しました。最終の福井大学に着いたのは 17 時ころでした。一人も事故に遭うことなく病気もせず、両手にお土産を抱えて帰国できました。

8. まとめ

(1) マレーシア元首相・マハティール氏との面談によって、アジアと世界の平和と友好について学習できました。また、日韓馬三国合同音楽会の見込みが出て来ました。

(2) アジアの平和共同体結成などについてマレーシア外務省で討論し、AALA 活動に有効な示唆を受けるなど、期待通りの学習ができました。

(3) マレーシアにおける多様性（民族、宗教、生物、文化など）を見聞し、学習することができました。

9. 謝辞

まず、ロジアン次席大使のご支援があったからこそ、今回のマレーシア訪問では大きな成果を得ることができました。記して深い感謝の意を表します。

市民レベルの平和と友好の団体である福井県 AALA に快く面談に応じて下さったマ氏に深甚なる謝意を表します。最後になりましたが、大変お世話になりましたマレーシア外務省の方々に深謝申し上げます。

以上



写真 46 毎日朝から晩まで本当によく世話して下さいったガイドのディクソンさんと添乗員の高坂さんに感謝します。

エリザベス・グレイス論文 「中野鈴子のプロレタリア詩」(要旨)の紹介

稲 木 信 夫

紹介にあたって

福井県の詩人中野鈴子への注目が近年広がりつつあるが、最近、イギリスの一女性に関心を持って研究していることがわかった。

オックスフォード大学日本学部院生のエリザベス・グレイスで、修士論文の執筆に主として中野鈴子の戦前の詩作品を選び、2年前の2009年4月、来日の機会に、福井の私を訪ねてきた。

これがきっかけで、鈴子についてのグレイスとのメールでの交流が始まり、論文は7月に完成し、8月にこの論文で修士試験に通った。

日本の現代文学を専攻する彼女が中野鈴子に関心を持ったのは、私の著書『詩人中野鈴子の生涯』(東京・光和堂刊)をネットで知り、日本から取り寄せ、学友たちとも読んだことにあったようだ。大学には日本文学の図書館もあるのだが、中野鈴子に関係する書物がほとんどないということで、論文に付けた「引用文献」にも、私の著作のほか、『中野鈴子全詩集』(フェニックス出版)、大牧富士夫『中野鈴子』(幻野工房)など、あとはいくつかの論文の名があるのみであった。それが論文執筆途中に私を訪ねる動機ともなったのだった。

グレイスは、その後、ご両親の病気で看病のためイギリス西部のウェールズの実家に帰った。家には弟が家業で働いていて、彼女は看病に専念した。しかしその甲斐なく、父が今年5月に亡くなられた。そしてなお母の看護を続けているとのことであるが、意志強く、さらに博士論文のための研究を志向しているものとうかがえる。

昨年初め、その修士論文を私は送ってもらった。題名は「中野鈴子のプロレタリア詩」というもので、序と4章から成り、A4用紙に約50枚、かなりの長文であった。論文の主テーマは、小林多喜二と同時代、戦前のプロレタリア文学運動にて「一田アキ」の文名で活躍した中野鈴子の作品に注目したものであった。これが鈴子の詩を考える原点であることを私は教えられた。

論文の終わりで、鈴子が東京から丸岡の実家に戻り、田畑に生きるに至ったことで、彼女のプロレタリア詩人としての道は一貫し、詩業もまた確立したのだと言い切っている。

「日本の一寒村の一本田に詩人が埋もれているが、そのように歴史上無視されていいものか。私は鈴子の作品を二流のものとは見ない。」

これが論文で述べた彼女の結論であった。

これを受けとめる日本の私たちに、鈴子の遺産を見きわめ、確かなものとする努力が、今問われているのだと私は思いたい。

論文を全文読み取るのに今年初めまで丸1年かかった。読み終えて早速、この論文の要旨の執筆を私は試みた。彼女が日本語に通じている人なのでほんとうに助かった。

そして、このほど『福井の科学者』誌に紹介したいとお話があり、感謝しつつ、「要旨」を公開することにした。グレイスの了解も得るべく連絡すると、大変喜んでもらえた。

文中にはヨーロッパの学者が数名登場するが、とくに現代フランスの哲学者ルイ・アルチュセール(1918年－1990年)に関連して、彼

女からあらためて論文についてメールがとどいたので、次に紹介する。原文は日本語だが、読みやすくするため若干私の手で加筆した。

「アルチュセールの論は、私たち人間は社会においてイデオロギーに参加するということです。ですから私たちが自然であるとみなすものも、アルチュセールのイデオロギー論を通して考えてみると、ぜんぜん自然なものではありません。

アルチュセールがとくに考えたのは、文化団体や組織などでのイデオロギーの働きです。たとえば、学校は国家のイデオロギーにかかわる文化的組織の一つです。子どもが学校で教えられるものはすべて子どものためだけでなく、国家や社会のためのものとされます。

マルクスは、その根源に経済を置いています。アルチュセールや後期のマルクス主義者はそれほど強くは言ってないと思います。むしろ、文化がどういうものか、どういう影響を及ぼすのかという問いに答えようとしていると考えます。

文芸作家の作品は、その作家のイデオロギー全体（学校、家族、協会、社会团体など）から

経験したもので作られるわけです。シャツが綿からつくられるように、文学はそうした現実から創作されるものです。

私の論文になぜ意味があるのかといえば、これによって、鈴子の詩を読んでもらえるからです。日本の当時のイデオロギーは軍国主義に典型的なものでしたが、鈴子の詩も、そのイデオロギーに抵抗しているものです。

アルチュセールはそこまで述べていないと思いますが、私がしっかりと考えたいのは、イデオロギーへのその抵抗です。

鈴子の詩にそのレジスタンスがどのように表現されているのかということです。」

グレイスの中野鈴子への思いは、この最後の数行にうかがえるようだ。

要旨の発表にあたって了解いただきたいのは、あくまで要点となる部分の引用を主としており、それもイギリスなどヨーロッパの事情にうといこと、また翻訳上の制約もあり、理解の届かない部分を省くなどしていることである。

いずれ、全文についてなお吟味して、後の機会に小冊子にまとめたいたいものと思っている。



・・・・・・・・・・・・・・・・

中野鈴子のプロレタリア詩 (要旨)
エリザベス・グレイス (訳・稲木信夫)

序

「花もわたしを知らない」という作品のほか知られていないが、日本の戦前の文学運動において大きな影響を及ぼした中心的な存在の若き女性がいた。彼女は中野重治の妹で、小林多喜二を友とした。宮本百合子も彼女の詩に注目、擁護した。

日本の一寒村の一本田(いっぽんでん)に詩人が埋もれているが、そのように歴史上無視されていいものか、私は鈴子の作品を二流のものとは見ない。

第1章 プロレタリア女性詩人の誕生まで

1. 初期

鈴子はその作品だけではなく、確固とした信念を持ち、プロレタリア詩人の道をたどることを諦めなかったことで、注目される。

鈴子は女子実業学校で寄宿生活をし、成績も優秀だった。教育は「良妻賢母」の思想のもとにあったが、小地主の中野家に生まれて、女性としては水準の高いものを身につけた。鈴子は、兄たちとは違った勉学の道をたどりつつ、学寮にあって文学に思いを寄せ続けた。

鈴子は金沢で中野重治の四高の文学仲間であつた窪川鶴次郎と出会う。だが、重治の東京帝大進学により一本田に帰され、村のしきたりの中に立たされ、窪川との別れがくる。父は鈴子に二度にわたり結婚を強い、鈴子はそれに抗っていく。

鈴子は思想や表現の自由を学び取った。同じ世代の多くの女性たちとは違っていた。やがて東京へ出て、プロレタリア文学の活動の中心に場をおく文学生活を始めることになる。

2. 東京での活動ー「恋は二の次 われわれはたたかうのだ(重治の鈴子への手紙)」ー

1928年暮れ、鈴子は上京した。そこで兄重治の文学とたたかいの熱意に深く感じて、鈴子も労働者階級の解放のたたかいとともに、文学の道を追求する決心をした。

上京早々、1929年4月16日の大弾圧(四・一六事件)で、鈴子は重治や西田信春とともに逮捕された。特高警察による文化団体への圧力の強化でもあった。この体験によって、鈴子は弾圧の犠牲者を救済する日本赤色救援会の活発な活動家となった。鈴子は獄中の小林多喜二と出会い、2年を超えて彼と何度も会う機会を持った。鈴子は官憲の不正や戦争をますます意識し、自身の詩をもって告発すべきだと感じた。詩の創作に努力するとともに、エッセイや小説を文化誌『女人芸術』などに発表、プロレタリア階級の社会的不平等を告発し始めた。

1930年から鈴子は文学運動に参加し始め、たたかいに立つ人々とともに、詩を発表した。プロレタリア女性の生き様を詩の1行に刻んだ。そこには力でもって押し伏せられ、踏みつけられた人々の日常生活の現実がある。

それは、彼女らの生活を知らしめる最初の声となった。

第2章 プロレタリア女性詩人の理論

1. プロレタリア文学理論ー蔵原惟人とプロレタリアリアリズムー

プロレタリア作家の現実に対する態度はあくまでも客観的、現実的でなければならない。蔵原惟人はあらゆる主観的構成から離れて現実を見、それを描かねばならないと論じた。

鈴子の詩がプロレタリア文学運動の中で、いかに注目されるようになったか、そしてそれを評価した文学理論がいかなるものであるかをみてみたい。

まず、この文学運動に大きな影響を与えた蔵原惟人の仕事を無視できない。1928 年に『戦旗』誌に発表された「プロレタリア・リアリズムの道」で蔵原は、プロレタリアリズムに先立つ、これと異なったりアリズムについて明らかにすることを試みた。そしてプロレタリア作家の主要な主題はプロレタリアートの階級闘争であるとして、プロレタリア前衛の眼をもって現実をきびしく描写することが、プロレタリアリズムの道であると単純明解に述べた。

蔵原は、西欧における他のリアリスト作家、即ち、ゾラ、フローベール、モーパッサンらの作家を参考に、彼らが「前衛の眼」から分離されてはいるが、確かな主観をすでに持っており、それが教育や知識の一定の水準のレベルとみなされたところのプロレタリア前衛それ自身の持つ能力に接近していくのであるとする。そして、蔵原は、将来へのはっきりした目的をもって、現実を見るに有効な創作を要求した。

つぎに蔵原は、「生活組織としての藝術と無産階級」(1928 年)で、プロレタリア階級の生活の真実、階級間の相互作用の正確な描写は、理論上の見地としても望ましいとした。トルストイやブハーリンの文を引用して、「藝術は社会主義の成功と思想の意義を持つ同時代の組織された生活と同じものである」と述べ、社会情勢の変化と同時代のたたかう階級を表現することが、プロレタリア階級の表現の根本であるとした。

蔵原は「プロレタリア・リアリズムの道」で、唯物弁証法の方法をプロレタリアリズムとしておくことも主張した。

蔵原は弁証法的唯物論が求めるものが何かを厳密には説明していないので、その点、マルクスの弁証法的唯物論による文学者の意図するものについて推しはかるしかない。

唯物弁証法には三つの法則があり、第一は

対立物の統一の法則、第二は否定の否定の法則、第三に量から質への転化およびその逆の法則である。

蔵原は藝術の方法として、弁証法的唯物論に適した真実を強調した。蔵原がプロレタリアリズムについて要求する第三のことについて考えてみる必要がある。すなわち、彼はプロレタリア文学の中の個人主義の心理を問題にしているのである。

しかし、蔵原の理論にある弱さについても知る必要があり、特別な社会集団について蔵原が要求したことを学問の水準に照らして、概念上、詳細に理解すべきである。

ここで、私たちは、プロレタリア運動における性の問題、女性の位置、そしてマルクス主義が考える「女性問題」などについて考え、論を初めに戻したいと思う。

2. プロレタリア女性論ーマルクス主義とプロレタリアート、そして「女性問題」ー

女性問題はマルクス主義者や社会主義者によってしばしば注目されてきたことである。ドイツの社会民主主義者オーガスト・ベベルは著『社会主義下の女性』で「女性の性は二重のくびきにあっており、その第一は、人間として社会的従属の下でがまんしており、第二には、経済的な従属で苦悩している」と言う。同じように社会歴史学者ヴェア・C・マックエは著『日本の女性社会主義者の創造』で、1920 年代に日本で翻訳されたベベルの書、また、1931 年に書かれた小林多喜二の小説「安子」の文章にもその影響は明らかであるとする。

20 世紀の後半に、不平等の概念がマルクス主義者の男女同権論者によって問われたのは「不幸な結婚」についてであり、議論の中心にはマルクス主義者ヘティ・ハートマンによって書かれた有名な文があった。ハートマンは、

初期のマルクス主義者の議論を非難した。「初期のマルクス主義者は、資本主義の下での男と女の間での意見の不一致の焦点を見ることに失敗した。彼らはそれ故に男による女の従属を既存のものとして認めていた」と。

蔵原惟人の全仕事でも、日本文学において問題になる女性についての評論が一つも入っていない。むしろ宮本百合子のような女性作家がプロレタリア文化運動において、扱いにくい女性問題で多くの評論で書いている。

3. プロレタリア女性詩論－中野鈴子とプロレタリア文学－

私は証明しなければならない。婦人問題は、マルクス主義者にとっても困難なものであった。文学用語の中で平等を見分け、メソジストによるプロレタリア文学のぞんざいな研究や論文の中からいくつかの真理を証明するのに、明らかに理論が求められる。

まず第一に、それらの研究は誤った仮定の上にあったから、マルクス主義や日本での理論上の適用についての完全な理解に立たねばならない。弁証法的唯物論を使った蔵原惟人の考察は、その適当な見本であるだろう。

次に、その理論がフランスのモーパッサンやゾラ、ロシアのトルストイやドストエフスキーのような作家の作品を含む西方の文学作品と比べるに十分なものであることである。

最後に、プロレタリア文学が要求しているものについては、日本のプロレタリアートの理論上の把握だけでなく、ソビエトロシアを含んで日本の植民地の朝鮮や樺太（カラフト）における運動についても考え合わさねばならない。

プロレタリア文学の成果において、特に疑わしいという点は少しもない。けれどもそう決めることは逆説的なものであって、価値をもつ文学作品には、そのための組織がたしかにあるので

あり、そこで作品は評価されるべきものである。

プロレタリア文学にかかわる女性作家の作品を評価すること、これは高度な問題である。

私は主張したい。鈴子の詩だけでなく、日本や東アジアのプロレタリア女性作家の作品が無視されている現状は、プロレタリア文学運動の発生に関わる歴史的事実を理解する上で有害であるし、全体として文学運動のなかでの女性の役割を誤り伝えるものである。

私は、素朴とされる鈴子の詩について主張したい。その詩は真実の芸術であり、価値の高い文学作品としてつくられた、リアリズムの手法と作家の誠意でもって私たちに与えられていると。

プロレタリア文学の評価の中で、性の不平等が焦点となるが、中野重治が妹の詩集『花もわたしを知らない』（1955年）によせた解説が注意をひくのである。重治はこう述べている。

「私は、この作者の世界がいくらか狭いように思う。もっと広い世界、ひろく見わたすことのできる高み、その高みを支えるに足る科学の勉強と現実観察、そういうものがこの作者に一そう必要なのではなからうか。」

私たちは、重治が鈴子の詩を兄として評価することで批判は出来ないが、たぶん、鈴子の詩は理論や兄の作品にあるような文学的厳しさには欠けていた。しかし、重治が父の出費により東京の大学にあって理想的なマルクス主義者を仲間としていたのとは違い、鈴子は文学者としての生涯の夢をもてなくする2度の強制的結婚にさらされたのだった。であるから、私たちは彼女の詩について考える場合、社会がもつ女性の現実を忘れないようにしなければならない。女性の書き手の作品が持つ文学的価値を認めることには限界があり、過去の研究をさらに発展させることが求められる。

しかも、重治の言葉にもかかわらず、鈴子

の詩は明白に評価を受けているのである。例えば「プロレタリア婦人作家と文化活動の問題」(1931 年)のなかで、宮本百合子は書いている。

「紡績工場に働いている若い婦人労働者の中に、若しかしたら、面白いプロレタリア詩をつくる婦人はいないだろうか、とは考慮されていない。そこまで大衆の中に沈まないでも、例えば『ナップ』その他にこの頃一田アキという名で望みのある詩を書く婦人が現れている。しかしそういう新しい婦人詩人のところまでは新進を求める手をのばさない。」

鈴子が初めて詩を発表し始めた時使ったペンネームが一田アキであった。百合子の言葉に明白なのは、鈴子の作品への支持であり、同時にまた、世界の文学にある性の不平等を当然とするものへの、プロレタリア女性作家の挑戦があるのを知るのである。

第 3 章 プロレタリア女性のこゝろープロレタリア女性詩を読んでー

1. 余白からの歌ーどのように鈴子を読むかー

中野鈴子の作品は蔵原惟人のプロレタリアリアリズムの規定と調和しているけれども、彼女の作品は蔵原のように議論をしない、簡潔なものである。彼女はプロレタリア女性の生活を引用してのスケッチでもって私の心を捉えるが、私たちはまだこの価値を評価すべき方法を持たない。私はまだ鈴子を主要な詩人などとは認めかすことは出来ないが、国を異にする立場から彼女の作品を読むことによって、それを証明することが出来るし、プロレタリア運動の中の女性の歴史や彼女らの要求を満たすための役割について一つ一つ捉えてみることは出来よう。これは特定の文化や歴史的文脈に関連するというものではないが、自然や社会が生み出すものを理解するための学者たちの討論や学問の動向にかかわるだろうが、同時代のレベルで、主観

や反主観のイデオロギーの相互に作用しあう中で生まれるものであろう。

日本の文学研究の中では、柄谷行人や、ジェームズ・フジのような学者の論がある。文学理論としてローアス・イリガレーやジュディシュ・バルトレーにおいて、性についての主観で意見の相違もある。今では以前より理論上は進んでいるが、まだ婦人作家のプロレタリア文学について、婦人の抵抗について、少ししか理解されていないのである。まだ不十分なもので、私たちにとっては日本の軍国主義下での抵抗の歴史の半分しか理解していないのである。朝鮮のような植民地での「協同一致」の苦難の文化は、それこそ半分しか見えない。私たちは鈴子の作品の分析によって、そうしたアンバランスを直すことから始めなければならない。

鈴子の作品について論ずるにあたっては、その骨組みの輪郭が必要になる。私の鈴子の詩をめぐる論の中心は、プロレタリア女性詩人の作品であるが、ルイ・アルチュセールの自然思想を骨格としたい。アルチュセールは明確に思想の構造について言っているが、彼の論は二つの主要点を持つ。

一つは、観念は個人の想像を実在の状態で表わすことであるとし、われわれの経験はイデオロギーの構築のうちに現実に実行されるものの表現に過ぎないとする。

その上で、加えて、(彼はフロイトの無意識論に繋いでいるが)それは、理由を知りつつ、ふるまっているので、われわれの経験はイデオロギーの形で、現実に実行されるものの心理の表現に過ぎないとしているのである。

2. プロレタリアの母

鈴子のプロレタリア詩の特長は、母の描写にあり、日本の軍国主義に立ち向かっていく時代に、プロレタリアの母たちの労働や、抵抗の足

跡をたどっていることである。

当然、1930～40年代に、統治上のスローガンとなった「良妻賢母」や「産めよ増やせよ」を解明していくものである。

ガイル・リィ・バーンステインは書いている。「家族は大衆の部分であり、生産、再生産で争い、そして国のために死ぬ」と。ここでは戦地での子どもの死に対して母は悲しみにくれることはなかったのか、息子が功を遂げれば喜んだのである。

鈴子の作品に母はどのように現われたか。その最初の詩は1931年作の「母の叫び」である。詩は駅から離れていく列車に悲嘆にくれる母をとらえていて、息子は遠く姿を消していく。彼女は息子が戦争に行かねばならないのを知っている。「あれがあの子の見おさめなのか」と断念しなければならない。読者は国家の「善」のために息子が犠牲となることへの不満を持っている。母はわが子の健康を心配するが、それはすべての母が経験することである。しかも、その子たちを救うことが出来ないのである。息子の命が国の所有とされることへの非難でもある。詩の終りの部分で、「おゝ恐ろしや／……飢え死にさせ」と、戦争の持つ意味を歌う。ここに立派な気高い死というものはない。この詩の終りで、母はプロレタリア階級の犠牲への理解をもつにいたる。そして抵抗を誓う。

つぎは1933年作の「母の手紙」である。ここでは母は投獄された息子への手紙の形をとり、労働組合運動で活動する息子の仕事を称える。詩の結びでその活動の正義を確信する。

二つの詩に共通する二つのポイントがある。一つは父親像には言及していないこと、二つには息子が母親を身近なものとして感じていないことである。

3. プロレタリアの妻

鈴子の詩は労働者たちの日々への共感に独特さがあり、詩人の純粹さが詩に効果を見せている。鈴子における変革のたたかいを多喜二と同じとするのは彼女が拒否するかもしれないが、彼と同じく強力なものがある。彼女は古い法律を一举に変えることを求めないが、労働者のたたかいのうちに強さを求め、文学者が集団としての社会の責任を果すべきとする蔵原惟人の求めに応える。それが鈴子の詩に特別な効果としてある。

詩「味噌汁」は、日々の心の中にあるものを詩を通して表現した。その後、鈴子は幅広い感情、社会の見落としがちな部分に共鳴し、一般民衆の感情をもって労働者の根本的な感情の存在を語った。詩「味噌汁」は家庭的なイメージの強さをもって政治家の投獄と圧制を表したものである。この詩は1931年8月に『ナップ』誌に発表された。日本共産党への弾圧でとらわれた幹部の夫とその妻の物語である。鈴子はモチーフとしてその妻を配することで、希望に生きて解放の日を望む、その部分を歌った。詩の最初の連は温かく、独房生活のすさんだものと対照している。読者は詩の中の妻の憧れに感動し、そこに孤独も見る。こうした点は、主観と主題について議論のあるところで、女性作家の作品に特に関係があり、女性がしばしば思想としての「性」をきびしく制限されていたなかで把握した概念である。鈴子の生き生きした描写は、彼女の主題を言葉以上に価値ある本来の意味で創造したのである。作家としての思想的骨格は、社会制度とともにある。

男女同権論者として知られるヘレンキクロスは、「女性は彼女自身を書かねばならない。女性について書き、また書くことに女性を持っていかなければならない。女性は作品の中で彼女自身を置かねばならない。歴史の中へ、彼女自身の

行動によって」と主張している。

私は同じように論じる。作品の中に女性を読むことをいかに学ばねばならないかを。また、いかに性についての主観を持つかについて、「味噌汁」にあるのは、妻の単純な体験であり、その日々を通して「協同一致」へ立ち上がる妻のさなざまな想いを述べているのである。それゆえ、「味噌汁」に、抵抗の始まりとしての妻の行動を見て、連帯責任を通しての抵抗の始まりを見るべきである。妻は長くない沈黙と自身の声を見つけているのである。

4. 妹として

1939 年 5 月、兄中野重治が法廷の場で共産党との関係を放棄すると公言したことで、鈴子は兄の思想的信念の土台が激しく慄くを感じた。活動そのものの大きな動揺と転向の時期であった。コミュニスト芸術家への政治権力による抑圧の最後の時であり、小林多喜二の虐殺、抵抗運動の危機の不吉な前兆があった。ミリアム・シルバーグが言ったように、多喜二の死で「重治は非常に動揺した」のだ。けれども重治は 1934 年まで転向しなかったものであり、結核の病で「心と体の抵抗力が弱っていた」。

多喜二の死が重治を転回させたのである、まもなく獄中から解放されていくのであるが、鈴子には兄の行動は分かりにくいものだった。彼女は自分自身を見つめることで、詩の新たな出発をした。

鈴子は詩「わたしは深く兄を愛した」を、兄の転向と同時に執筆を始め、それを翌年 2 月に完成させた。詩は、兄が法廷を去るにあたって持った喪失感でその詩を閉じている。それは自ら信念を公に捨てた兄の決断に勇敢に抗議したものだった。兄への厳しい批判となる詩を発表することは鈴子自身危険なことであるが、鈴子はいまだかつてない不屈な精神をもって、兄

のとった道に同調しなかったのだ。「いかなる時も、結局は自身を裏切らなかった彼女の資質、強さを見なければならぬ」（稲木・『詩人中野鈴子の生涯』）のである。もしこれを鈴子の兄への懲罰と読むならば、苦痛ともなるだろう。兄をもはや愛しないと強調する詩であれば、読者は打撃を受けたろうが、「深く愛した」とすることで、読者は生々しい兄妹の愛の印象を受けるのである。二人の絆である社会主義思想が一般の絆より力強いものであり、それは「ながい時間が一時に去ってしまっていた」と言う彼女の声明でもって補われている。読者は詩の力として彼女の思想的確信を感じる。鈴子は、兄としての重治の名において「妹」として、兄の問題に応じたのだ。それはプロレタリア運動の一人としてであった。この理性のために、兄妹の「愛」の観念は全く異なった意味を持った。

5. 鈴子の反戦詩

1930 年初め、プロレタリア文学作品は、蔵原の論の影響が明らかに弱まって、中野重治のような作家たちに思想的転換が起こり、ますますファシズム的な圧制が強まるにつれ、作家たちの表情も変わっていった。

ナルプ（日本プロレタリア作家同盟）が 1934 年に解散をした時から、この運動に終りがくることはおおそ考えられていた。これは女性の作家たちの中にたしかにあった。軍国主義国家の下、沈黙を続けるか、作家として国家に従うか、どちらかでいることである。

1940 年代の初めに、鈴子は朝鮮のプロレタリアートのなかで新たな読者をひろげた。彼女は朝鮮半島での「内鮮一致」を歌った。いくらかが『東洋の光』誌のような朝鮮の情報誌で発表されたが、それはプロレタリア詩人金龍済の努力によるものだった。金は 1937 年に日本での政治弾圧の下、母国朝鮮へ強制送還されてい

た。鈴子はその金との結婚の約束のもとに、ソウルへ行った。

北海道文教大学教授神谷忠孝は論文「朝鮮版『国民文学』について」（北海道文教大学論集 10）で、「植民地であった中で日本語を話し思索しなければならないが、表現の検閲が本土よりいくらかゆるやかだった」と述べているが、「内鮮一致」とか、プロレタリアの抵抗の可能性がまだ少ないなかでの鈴子であった。

鈴子はすでに崩壊した運動の中で熟考したので、政治の圧制の中にもかかわらず、1930 年代後半に多くの作品を生んだ。そこには反戦の感情がはっきりと出てきた。さらに言えば、この時代の鈴子の作品の中に、性別によって差別された「女性」観に対する抵抗がある。それを最初に証明するのが、1936 年の詩「少年の体はどこも実っていない」である。戦争に出て行くイタリア軍隊の姿を描きながら、大きな槍を運んでいる兵士の真ん中にいる 12 歳の少年の姿を注視している。戦争により、少年の体が結果として実らなくなることをほめかしており、今少年の体が肉体的に自然の状態としての少年であることに心を向けている。まもなく粉々に碎かれることを思いつつ鈴子は歌う。「あどけない目は決心にふるえている／私は涙が出てきた」と。そして少年の体が未熟であることを知っていて、男の体格への誤った意識を感じつつ、詩は「この子供の父親アニキはすでに戦地にさらされている／少年は進んでゆく」と歌うことで補強されていく。戦地に赴くことを強制される男たちの思いへの鈴子の批判があるが、読者はそこに具体的に表わされた悲劇を感じる。しかしこの詩はイタリアに狙いをつけたものでもない。日本そのものへである。詩が持つ叫びにイタリアへの特別な関わりをもつ理由はなく、日本での映像であるに過ぎない。

二つめの詩は 1937 年『文学案内』誌に発表

の詩「別れ」である。この詩も徴兵された村の若者の出征を送る人々を歌ったものである。詳細な表現で、出来事を弾奏的なリズムで表現する。この詩の結末で、兵士が乗る汽車が去る時、彼の母親は出発によりひき裂かれていくのを必死に追いかける。そこに詩を通して連続している別個の、あるいは同時の感動があり、その詩に戦争への男と女のそれぞれの反応を分ける澄んだ表現がある。母や妻である女性は、男たちが努力し支持する戦争を教えられる。そこに比喻がある。男たちは女性の叫びの中で祝われる。

私はこれを女性たちと同じ絶望を感じる兵士たちの群像としてほめかすつもりはない。彼らは戦争を擁護しなければならないと命令され、そして従う。女性は徴兵を止めることができず、彼女らの「女性らしさ」でもって、伝説的な悲嘆の表現で叫ぶことが出来ただけだ。基本的にこれらの詩は、男がレジスタンスできないところでの女のレジスタンスを表わす。そして歴史は証明した。多くの母たちは、戦争を推し進める国のために働くことを息子が申し出たことを。

第 4 章 「花も私を知らない」－抵抗の生涯の結末－

鈴子の生涯について、私が研究者の稲木信夫を訪ね、鈴子が常に愛を求めているが、その生涯を要約してどう言えるかと尋ねた時、ただちに「愛と抵抗の生涯」との返答があった。私は鈴子がつねに愛を求め、しかもそこに抵抗が伴うことで、先進的な人生を選択したことに打たれた。稲木の言葉は、鈴子の生涯を熟考してのものと理解できた。彼は、鈴子の実家へ戻り、田畑に独り生きるのを見て、こうしてプロレタリア女性の晩年の困難を封じ込め、鈴子の詩を確立したと見た。これは些細ななかでの深い孤独で、時代とともに色あせることのない大きな力なのである。鈴子の詩は軍国主義の時代に抵

抗したプロレタリア女性の肖像なのだ。鈴子の作品の中にある女の主題は、硬い形で抵抗の形を成しつつ、具体的にその主題の説明を求めている。鈴子の詩は抑圧された大衆としての女性を生き生きと描き、彼女らを縛っている思想との対立を強調し、そしてリアルな叙述で一貫している。彼女の詩は、男性の「軍国主義」をあきらかな物語として見せ、婦人の従属の肖像を描いたことで歴史をも明らかにして見せたのである。

私は鈴子の詩の特別な文化的価値をまだ明らかにできないが、そこにある理性を澄んだものとして見れる。私は当時の蔵原の論も念頭に置きながら、鈴子にとっての初期の作品から抵抗を示す作品を選んでいるのである。私は鈴子の作品から名作と呼ぶべきものを選んでいるのではなく、全作品から名作を暗示することもしない。その研究は今後に待たねばならない。

私が言いたいのは、鈴子のプロレタリア詩、抵抗詩と見る作品の中で、女性問題について注目すべきもののあること、しかもそれが鈴子の作品ではめずらしいことではないということである。鈴子の詩を論ずれば、女性の生き方を読み取ることが必要であり、それは、さらに言えば、男女同権論にまで辿りつくのであり、抑圧された人々の隠された抵抗の歴史に至るのである。鈴子は自ら革命的女性を体現した。上野千鶴子のような男女同権論者たちは日本の女性論を著しているが、それらも女性の役割について正しく主張していた。現今の女性作家は、作品の中で相対的に自由に過激に抵抗できるが、鈴子の世代の女性社会の道具とされて異なった立場で働いていたし、そのイデオロギーも国の支配下でのもので、実際、女性作家たちは全般に制限されていたのである。とくに 1928 年の三・一五事件のように国家は集团的に押し、多くの指導者たちを投獄し、警察は残忍で無情で

あった。どのように女性作家はこの圧制に抵抗出来ただろうか。

(2009 年 7 月)



編集後記

東日本大震災から半年が過ぎた。地震の被害を受けた地域は徐々に復興への兆しが見え始めたが、原発被害も受けた地域はまだまったく先の見通しもたない状況である。脱原発の世論が高まったのは当然の成り行きであるが、一方で原発推進側の巻き返しも陰で進行しているようである。福井支部は今期支部結成 40 周年を迎えるが、支部結成記念講演会・連続公開講座・北陸地区シンポで原発問題を取り上げる予定でいる。今号には巻頭に今回の原発事故に関する支部幹事会の見解を掲げた。

前号を急遽原発問題特集号としたため、今号は前号に予定していた福井県 AALA の「マレーシア平和と友好の旅」の関連原稿が中心となった。「マレーシア平和と友好の旅」といっても、タイトルからも分かるように単なる物見遊山の旅ではもちろんない。福井県 AALA は毎年のように研修旅行（スタディ・ツアー）を行なっ

ており、その様子は『福井の科学者』でもこれまで何回も紹介してきた。今回の旅行もこれまでの研修旅行同様、十分な準備と予習をしたうえでの出発であった。帰国後には冊子をつくり、報告会も行なう本格的な取り組みであった。福井県 AALA 理事の北出芳久氏と同・理事長の山本富士夫氏の詳細な報告で、その全体像と意義は理解していただけたと思う。

詩人で中野鈴子の研究者としてよく知られている稲木信夫氏には、オックスフォード大学日本学部女性院生のエリザベス・グレイス氏の書いた修士論文「中野鈴子のプロレタリア詩」の抄訳を投稿していただいた。外国人が福井生まれの詩人・中野鈴子を取り上げて論文を書いたのは初めてであろう。エリザベス・グレイス氏は日本への留学経験もあり、壺井繁治賞を受賞した稲木氏の『詩人中野鈴子の生涯』光和堂（1997）を読んで、興味をもち研究を始めたという。グレイス氏の研究によって中野鈴子の研究がさらに広がったことは嬉しいかぎりである。

(高木秀男)

福井の科学者 第 116 号 2011 年 10 月 20 日発行

編集・発行 日本科学者会議福井支部 頒価 500 円

連絡先 〒 910-8507 福井市文京 3-9-1 (郵送の場合)
福井大学大学院教育学研究科 680 円
教職開発専攻 (教職大学院)
森 透 研究室気付
TEL/FAX 0776-27-8725
E-mail t-mori@u-fukui.ac.jp

= 会員の著書紹介 =

書名 畜産物と健康 --卵・牛乳・肉の生産から考える

著 者 加藤武市 発 行 科学堂
発行年月日 2005 年 6 月 定 価 1500 円

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 第 1 章 長寿と食 | 第 6 章 我が国の農産物をめぐる諸問題 |
| 第 2 章 食生活の改善と長寿 | 第 7 章 食糧自給率は如何にして下がったのか |
| 第 3 章 畜産物の安全・安心を取り巻く課題 | 第 8 章 現在の食料を考える |
| 第 4 章 家畜の特徴 | 第 9 章 自給率の向上と食生活の見直し |
| 第 5 章 グローバル化での我が国の畜産経営 | |

福 井 県 医 療 生 活 協 同 組 合

〒 910-0026 福井市光陽 2 丁目 18 - 15
TEL 0776 - 27 - 2318 FAX 0776 - 24 - 8290

光陽生協病院

TEL 0776 - 24 - 5009

ショートステイ きらら(病院併設)

TEL 0776 - 21 - 8525

光陽生協クリニック

TEL 0776 - 24 - 3310

デイケア さんさん

TEL 0776 - 24 - 5524

光陽訪問看護ステーション

TEL 0776 - 24 - 9996

光陽ホームヘルパステーション

TEL 0776 - 24 - 9997

光陽訪問看護ステーション

居宅介護支援事務所

TEL 0776 - 24 - 9990

つるが生協診療所

TEL 0770 - 21 - 0176

光陽生協歯科診療所

TEL 0776 - 24 - 8784

たけふ生協歯科診療所

TEL 0778 - 22 - 5666

さかい生協歯科診療所

TEL 0776 - 67 - 6333

つるが生協在宅総合センター なごみ 和

TEL 0770 - 25 - 4311

小規模多機能介護施設

しんじょういこい

TEL 0776 - 60 - 2110

総合企画印刷 広告・パンフレット・DM・雑誌・記念誌・機関誌
自費出版・会員名簿・会員管理・アンケート集計

(有)ワープロセンター HOPE

〒 915-0847 福井県越前市東千福町 21-4
TEL:(0778)24-1146 FAX:(0778)24-2339
e-mail: hope01@galaxy.ocn.ne.jp